

一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育のあり方

—— カリキュラム・マネジメントの視点を通して ——

永田聖子・佐久田伸一・寺井俊博・後藤直樹
 長浜朝子・グレイ雅美・中村円・比嘉雅美
 林史子・屋嘉比仁・真喜屋篤

キーワード キャリア教育 キャリア教育で身に付けさせたい4つの力
 生きる力（資質・能力） 社会に開かれた教育課程 学校教育目標
 学ぶ意義 学び・育ちの実感 カリキュラム・マネジメント
 主体的・対話的で深い学び 沖縄県キャリア教育の基本方針



I テーマ設定の理由

これからの時代は知識・情報・技術が加速度的に変化し、社会の変化が予測困難な時代だといわれている。また2020年は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大等により、これからの先行き不透明さを一層認識せずにはいられない社会状況となった。

このような予測困難な社会状況の中、平成28年に取りまとめられた中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び方策等について」（以下答申）においては、「学校と社会との接続を意識し、子供たち一人一人に、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育み、キャリア発達を促すキャリア教育の視点も重要である。」「教育課程が、学校と社会や世界との接点となり、さらには、子供たちの成長を通じて現在と未来をつなぐ役割を果たしていくことが期待されているのである。」など、学校教育の中で取り組む「キャリア教育」の重要性について繰り返し提言された。それらを踏まえ学習指導要領総則（平成29・30年告示）（以下総則）で「キャリア教育の充実」が示され、特別活動の学級活動（ホームルーム活動）に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が新設された。

さらに学習指導要領前文（平成29・30年告示）（以下前文）では、予測困難な時代を見据え、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有し、学校教育のみならず、社会と連携・協働しながら実現を図っていく「社会に開かれた教育課程」の実現が示された。そしてその実現を目指して、各学校において学校教育活動の質の向上を図る手立てとして示されたのが「カリキュラム・マネジメント」である。

つまり、これからの予測困難な時代を子どもたちがよりよく自分らしく生きるためには、学校の学びと未来をつなぐキャリア教育はより必要不可欠であり、それぞれの学校で「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「どのように学び」「どのような資質・能力を身に付けられるようにするか」を明確にしておくための「カリキュラム・マネジメント」の充実が求められているのである。

本研究では、今回の改訂で示された「キャリア教育の充実」を図るために、「一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育のあり方」というテーマのもと理論研究・実践研究を進め、各学校においてこれからの時代に求められるキャリア教育のあり方を提言する。さらに、「カリキュラム・マネジメント」の視点を通して「キャリア教育」を捉え、その関連性を明確にすることで、学校教育の充実や学習指導要領の実施に向けた一助となるよう研究を進めていく。

II 研究目的

本研究では、3つの柱を立て複数年（当初予定2年間）の継続研究を行う。1つ目は、各学校で育成したい資質・能力の実現に向けた「キャリア教育」の理論研究・実践研究に取り組み、成果と課題をまとめる。2つ目は、幼・小・中・高・特別支援学校の「キャリア教育」に関する学校・教職員のキャリア教育実態調査・意識調査を実施し、本県におけるキャリア教育の現状と課題を把握し、分析・考察を行う。3つ目は、本県が示した「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和2年）（以下県基本方針）に基づいて、各

校種のキャリア教育の実践を収集し、授業実践事例を提供する。さらにリーフレットを作成し、各学校においてキャリア教育の推進が図られるように発信する。

以上3つの柱に基づいて研究を行い、子どもたちのよさを未来へとつなぐ「キャリア教育のあり方」を各学校へ還元し、学校教育活動の充実や学習指導要領の実施に向けた学校支援に資することを目的とする。

Ⅲ 理論研究

1 これからの時代に求められるキャリア教育のあり方

「キャリア教育」という文言は、平成11年の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において初めて提言された。当時は、新規学卒者のフリーター志向が広がり、進学も就職もしていない高等学校卒業者が全体の9%を占めたことを受け、「キャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」と提言された。その後、教育基本法の改正（平成18年）などを受け、答申（平成23年）で「キャリア教育」「職業教育」とは何かを明らかにし、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」と新たに定義づけ、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる「基礎的・汎用的能力」として「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力を示した。

このように20年以上にわたり「キャリア教育」の重要性が示されてきたが、今回の答申（平成28年）においては、「職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではない」「社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導を行っているのではない」などの課題も指摘された。さらに同答申では「こうした課題を乗り越えて、キャリア教育を効果的に展開していくためには、教育課程全体を通じて必要な資質・能力の育成を図っていく取り組みが重要になる。」と提言し、特別活動の学級活動（ホームルーム活動）を中核としながら、総合的な学習（探究）の時間や学校行事、道徳科、各教科における学習等、学校教育活動全体を通じてキャリア教育を行うことが求められた。

このような「キャリア教育の充実」の背景には、情報技術の飛躍的な進化や、経済や文化等社会のあらゆる分野の急激な構造変化がある。同答申では、このような複雑で予測困難な社会変化の中で、学校教育が目指す子どもたちの姿として「様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力の育成が社会的な要請となっている。」さらに、「こうした力の育成は、学校教育が長年『生きる力』の育成として目標としてきたものであり、学校教育がその強みを発揮し、一人一人の可能性を引き出して豊かな人生を実現し、個々のキャリア形成を促し、社会の活力につなげていくことが、社会からも強く求められているのである。」と提言している。この提言を受け今回の総則では、キャリア教育の充実を以下のように示している（表1）。

表1 学習指導要領総則（平成29・30年） キャリア教育の充実

小学校	児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。
中学校	生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が 自らの生き方 を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。
高等学校	生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が 自己の在り方生き方 を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。

これまでの答申や学習指導要領改訂を踏まえると、学校教育を通して子どもたちが学ぶことと自己の将来のつながりを見通しながら、学校教育活動全体で、社会で自立できる「生きる力（資質・能力）」

を育んでいくことが必要である。本研究では、これから求められるキャリア教育のあり方とは、学校教育全体を通じて、予測困難な時代を見据え各学校の実態や発達段階等に応じて、育みたい「生きる力（資質・能力）」を明確化・具体化し、育んでいく学校教育活動そのものと捉え研究を進めていく。

2 一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育のあり方とは

(1) キャリア教育において、一人一人のよさを未来へつなぐとは

先述したようにこれからの時代に求められるキャリア教育とは、学校教育全体を通じて生きて働く「生きる力（資質・能力）」を育んでいく教育活動そのものである。

我が国では早い段階から、育成したい資質・能力に「生きる力」と名付け、「生きる力」の育成に向けて取り組んできた。今回の答申（平成 28 年）においては、「言い換えれば、これからの学校教育においては、『生きる力』の現代的な意義を踏まえてより具体化し、教育課程を通じて確実に育むことが求められている。」と提言している。それを受け今回の改訂で特に重視された点は、社会に出たときに生きて働く力となるよう、「生きる力（資質・能力）」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、三つの柱で整理したところである（図 1）。

この三つの柱に基づいて、各学校で育みたい「生きる力（資質・能力）」を明確にし、具体的に取り組んでいくことが「キャリア教育」の推進につながる。そのためには子どもたちが「何のために学ぶのか」「その学びを通じてどのような力が身に付いたか」という「学ぶ意義」を認識することが重要となる。

今回の答申（平成 28 年）では、「子供たちに必要な資質・能力を育んでいくためには、各教科等での学びが、一人一人のキャリア形成やよりよい社会づくりにどのようにつながっているのかを見据えながら、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。」と提言している。

日々の学校教育活動の中で、「各教科等をなぜ学ぶのか」という「学ぶ意義」を教師が明確にし、その意義を子どもたちと共有しながら、学校教育を実践していくことで、子どもたちは社会と学びの関係性を理解し、これからの未来をよりよく生きるための学びの大切さを実感する。

県基本方針の中で調査結果から得られた課題として「中学校・高等学校においては、主体的に学習に取り組む態度に課題があり、学校教育活動を通して社会と学びの関係性を理解させる必要がある。また、進路達成に向けた目的意識を持った学習や具体的な行動についても課題があり、目標に対して継続して努力する態度の育成が必要である。」と述べている。それを受け「沖縄県学力向上推進 5 年プラン・プロジェクトⅡ」（令和 2 年）では学力向上の取り組みとして 3 つの視点を示している。視点 1「自己肯定感の高まり」は「児童生徒が、自分のよさや可能性を認識すること」、視点 2「学び・育ちの実感」は「児童生徒が、学ぶことの意義や価値を実感し、資質・能力を伸ばすこと」と述べ、視点 3「組織的な関わり」で学校教育活動の質の向上を図る重要性を述べている。

以上のことを踏まえると、各学校においては「身に付けさせたい資質・能力」の育成を目指して、「学ぶ意義」を明確にし、学びを通して「できた」「分かった」「得意だ」という一人一人のよさや可能性を積み重ねていく学校教育活動に取り組むことが重要となってくる。そのような取り組みの中で、子どもたちは「自分のよさや可能性」をどう伸ばしていくか、自分ができることは何か、そのためにどう行動することが重要なのかという意識の変容が起こり、本県の課題である主体的に学習に取り組む態度の育成や目的意識の高揚という課題解決にもつながると考える。そしてその学びの連続性の先にある子どもたちの姿こそが、県基本方針で示されたキャリア教育の目標「目的意識を持って、様々な人と協働し、社会を支える自立した人材の育成」すなわち「生きる力（資質・能力）」を備えた姿につながっていくのだと考える。

本研究では、自分のよさや可能性を認識し、自分のよりよい未来のために成長し続けようとする子どもたちの姿を「一人一人のよさ」と捉え、その姿を目指し各学校において、子どもたちの学びをどう未来へとつないでいくかという接続の視点を共有し、組織的かつ計画的に実践していく学校

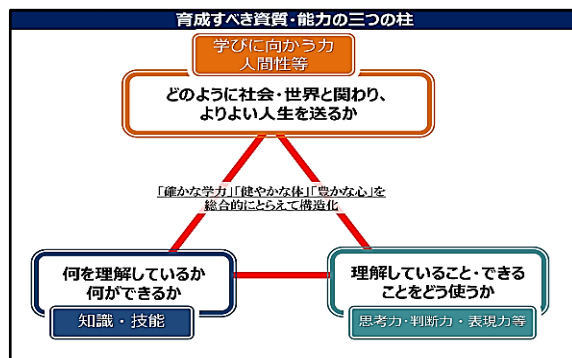


図 1 育成すべき資質・能力の三つの柱

教育活動を「一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育」だと考える（図2）。



図2 キャリア教育のイメージ

(2) 一人一人のよさを未来へつなぐ学校・教師の視点について

それぞれの学校教育活動を行う際に「何をどのように学ばせ」「生きる力(資質・能力)」を育んでいくのかという接続の視点を持つことが重要となり、そのような視点を持って取り組む学校教育活動全てがキャリア教育だといえる。県基本方針が示した、3つのキャリア教育の推進ポイントの中の1つ「地域・企業等と連携した体験活動等を通じた学び」の中で「今までの取り組みが教員の意識の仕方と児童生徒への声かけ次第で、そのままキャリア教育の実践になる。目的や目標を明確化して、児童生徒を送り出すことが必要である。」と述べている。つまり、これからの時代が求めるキャリア教育とは、まったく新しいことを始めるのではなく、これまで行ってきた学校教育活動を学びと社会そして自己の生き方等とどう「つなぐ」という視点を教師間で共有しながら、「何のために学ぶのか」という「学ぶ意義」を明確にし、その学びを通して「できた」「分かった」という「学び・育ちの実感」を積み重ねながら、生きて働く「生きる力(資質・能力)」を育むことのできる取り組みへと1段階ステップアップさせることである。

では具体的に、学びを未来へ「つなぐ」接続の視点とは何だろうか。県基本方針では、平成23年に示されたキャリア教育で身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」を「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」「ふり返る力（自己理解・自己管理能力）」「やりぬく力（課題対応能力）」「みとおす力（キャリアプランニング能力）」と分かりやすい言葉で示している（表2）。本県が示す「かかわる力・ふり返る力・やりぬく力・みとおす力（以下か・ふ・や・み）」を、学校教育活動の指導場面において意識することで、その学校教育活動で身に付けさせたい力や活動そのものの捉え直しや見直しが明確になり、「学ぶ意義」や「学び・育ちの実感」を積み重ねていく学校教育活動の工夫・改善につながると考える。

表2 キャリア教育で身に付けさせたい4つの力

かかわる力	ふり返る力	やりぬく力	みとおす力
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
多様な集団の中で他者とかかわる力、進んで考えや気持ちを伝え合う力、人や地域を大切に思う気持ちや感謝する心、協力する力、社会に参画し、社会を積極的に形成する力など	行動を振り返り、改善につなげる力、自己の役割を理解する力、情報・助言を正しく理解し自分を見つめる力、自分のよいところを見つめる力など	問題を発見できる力、問いを立てる力、課題に対応した計画を立案する力、計画を実行する力、発想（想像）する力、間違いや他人との違いを恐れない力、最後まで粘り強くやり通す力など	将来を想像する力、自分の目標を設定する力、目標設定のために計画を立てる力、立てた目標を確認し次につなげる力、自ら主体的に判断して、キャリアを形成していく力など

(3) 学校教育活動の工夫・改善について

2020年に新版として日本キャリア教育学会が発刊した「キャリア教育概説」の中では、各校種で行われている実践を紹介しながら、これからのキャリア教育の展開について以下のように述べている（表3）。

表3 キャリア教育の展開（「新版 キャリア教育概説」から引用）

	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
実践校	○東京都 板橋区立 中台小学校 ○東京都 世田谷区立 尾山台小学校	○東京都 小平市立 小平第六中学校 ○広島県 福山市立 鳳中学校	○京都府 立命館宇治中 学校・高等学校 ○埼玉県 川口市立県陽 高等学校	○A県立B特別支援学校 ○神奈川県 横浜市立 二つ橋高等特別支援学校
キャリア教育の展開	小学校段階の子どもたちに早くから目指す職業を決定させたり、具体的な資格につながる能力を身に付けさせたりすることだけでなく、人と共に生きていくことの大切さや、学び続けることの楽しさを体感させ、学ぶことと生きることとのつながりについて考える機会を創り、子供たちを社会の創り手として育てていくことが期待される。	中学校教育の中でキャリア教育を推進し、「基礎的・汎用的能力」を育成するためには、校種間の連携とカリキュラム・マネジメントを必要とする。 （中略）中学校のキャリア教育は、職場体験に特化されてしまった傾向がある。職場体験はキャリア教育にとって大事な取り組みではあるが、これを生かし、プラスに作用させるのは全学年で取り組むカリキュラム・マネジメントの存在である。	新学習指導要領の授業改善の視点は、「主体的・対話的で深い学び」とされ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成するものである。2校に共通しているのは、学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントが着実に実践されている点である。	ただ単に就労することを目指すのではなく、自己理解やマッチング等に関する内容を中心に学習しながら、卒業後の就労生活に必要な様々な能力を獲得し、それらのスキルを活用しながら社会の一員として豊かな生活を送ることができるように在学中から準備をすることが特別支援学校においてはより強く求められる。

「キャリア教育概説」において紹介された実践事例の共通項は、それぞれの発達段階に応じて、身に付けさせたい力を明確化・具体化しながら、様々な学校教育活動を組織的・計画的に取り組んでいることである。各学校においては、それぞれの学校の実態や校種に応じた課題を明確にし、どの学校教育活動を軸として取り組んでいくことが、子どもたちの「学び・育ちの実感」をより高め、「生きる力（資質・能力）」を育むことにつながるのかを示し、学校教育活動の評価・改善を繰り返すことが重要となっていく。

総則において「学習評価は、学校における学校教育活動に関し、児童（生徒）の学習状況を評価するものである。『児童（生徒）にどういった力が身に付いたか』という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童（生徒）自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価のあり方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取り組みを進めることが求められる。」と示している。つまり評価を行う際には、その目指す児童生徒像にどれだけ近づけることができたかという学習の成果を見取る「教師の指導改善につながる評価」と児童生徒自身が自らの学習を振り返って、自己のよさや可能性を積み重ねる「児童生徒の学習改善につながる評価」という両輪が大切となってくる。

各学校においてはこれからの時代を見据えながら、教職員が学校教育目標を共有し、学校教育活動を組織的・計画的に実施しながら、教師側と児童（生徒）という両方の視点を持って評価・改善していくことが、学校教育の質の向上につながり、その取り組みが今回の改訂で示された「カリキュラム・マネジメント」となる。

3 キャリア教育とカリキュラム・マネジメント

(1) カリキュラム・マネジメントについて

今回の答申（平成28年）では、「子供たちの日々の充実した生活を実現し、未来の創造を目指していくためには、学校が社会や世界と接点を持ちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学ぶこ

とのできる、開かれた環境となることが不可欠である。そして学校が社会や地域とのつながりを意識し、社会の中の学校であるためには、学校教育の中核となる教育課程もまた社会とのつながりを大切にする必要がある。」と「社会に開かれた教育課程」の実現を提言し、それを踏まえて前文において、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。」と示された。このように今回の改訂においては、子どもたちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、その資質・能力を学校教育だけで育むのではなく、社会と共に連携・協働しながら育む必要性が示されている。この「つなぐ」という接続の意識を持った学校教育活動がキャリア教育であり、これから「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて重要となってくる。

では、カリキュラム・マネジメントはどのように「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて関わっていくのだろうか。カリキュラム・マネジメントは総則において、「各学校においては、児童（生徒）や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の学校教育活動の質の向上を図っていくこと」と定義されている。つまり「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子どもたちにこれからの時代に必要な「生きる力（資質・能力）」を育てていくためには、学校教育の改善・充実が必要となるが、その手立てとなるのが「カリキュラム・マネジメント」である。カリキュラム・マネジメントの目的は学校教育目標の実現である。その学校教育目標の実現に向けて、3つの側面を手立てとし、学校教育全体を工夫・改善しながら学校教育活動の質の向上を図ることがカリキュラム・マネジメントである。キャリア教育に取り組む際に、子どもたち一人一人のよさを未来へつなぐためには、どのように教育活動の質の向上を図るとよいのか、「つなぐ」という接続の視点のより具体的な手立てとなるのが、カリキュラム・マネジメントなのである。

(2) カリキュラム・マネジメントの三つの側面を通して、キャリア教育を捉える

今回の答申（平成 28 年）では、カリキュラム・マネジメントを、以下の三つの側面で捉えている（表 4）。

表 4 カリキュラム・マネジメントの三つの側面

側面①	側面②	側面③
教科等横断的な視点	PDCA サイクル	人的・物的資源の活用
各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。	教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立すること。	教育内容と、学校教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

① 教科等横断的な視点について

今回の答申（平成 28 年）ではカリキュラム・マネジメントの三つの側面の中でも、特に「教科等横断的な視点」について強調されている。それは、これからの時代に必要な資質・能力を育てるためには、一教科に限定されない汎用的な資質・能力を様々な教科・領域で総合的に育むことが求められているからである。

各学校では、学校教育目標や教科等で身に付けさせたい資質・能力を「キャリア教育の 4 つの力（か・ふ・や・み）」で具体的にし、各教科・領域等をどのようにつなげていくことが「学び・育ちの実感」を積み重ねながら「生きる力（資質・能力）」の育成につながるのか、学校教育活動を組織的に配列していくことが重要となる。その際、「身に付けさせたい資質・能力」、又はそれぞれの「学習内容」でつなげていくのか、あるいは「現代的な教育課題」、もしくは言語活動などの「学習方法」等で学びをつなげていくのか、各学校の実態に応じて設定し、組織的・計画的に実施することが重要である。

② PDCA サイクルについて

PDCA サイクルは、これまでも各学校において、教育課程を軸に学校教育活動や学校経営の見直しを図るなど、学校教育目標の実現に向けて活用してきたと思われる。本総合教育センターが作成した「ハンドブック カリキュラム・マネジメントのポイントと実践事例の紹介」（令和2年）の中でも、アンケート調査や校内研修を活用してのPDCA サイクルを回す学校事例が紹介されている。さらにハンドブックでは「カリキュラム・マネジメント」にはタイプがあり（表5）、学校全体を対象とした大きなカリキュラム・マネジメントだけではなく、効果が上がりそうな所から取り組む必要性を示している。各学校においては、全ての教職員が主体となり、「キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）」でそれぞれのタイプ（教育活動等）を捉え直し、PDCA サイクルを学校教育活動の回せるところから回し、工夫・改善を図っていくことが重要である。

表5 6つのカリキュラム・マネジメントタイプ

タイプ	内容	担当・取組の主体
生徒のカリキュラム・マネジメントタイプ	自己の学びに関すること	児童生徒自身
授業のカリキュラム・マネジメントタイプ	個々の授業づくり 担当者の授業づくりや単元計画に関する工夫改善	授業担当者
教科・領域のカリキュラム・マネジメントタイプ	各教科の授業づくり 各教科における授業づくりや単元計画に関する工夫改善	各教科主任
学級のカリキュラム・マネジメントタイプ	学級経営 学級の児童生徒の実態を踏まえた学級づくりの工夫・改善	担任
学年のカリキュラム・マネジメントタイプ	学年経営 担当学年の児童生徒の実態を踏まえた学年経営の工夫改善 学年団としての基本方針、実践、見直し等	学年主任
学校のカリキュラム・マネジメントタイプ	学校経営 学校経営全体計画、グランドデザイン、学校教育目標の具体化・共有化、校内研修テーマの推進など	教務主任・教頭・校長

③ 人的・物的資源の活用について

今回の答申（平成28年）では「今後、子供たちに求められる資質・能力を明確にして地域と共有したり、学校経営の見直しを図り学校の特色をつくり上げたりするためには、教育課程の編成主体である各学校が、学校教育の軸となる教育課程の意義や役割を再確認し、地域の実情や子供たちの姿を踏まえながら、どのような資質・能力を育むことを目指し、そのためにどのような授業を行っていくのか、その実現に向けて、人材や予算、時間、情報、施設や設備、教育内容といった学校の資源をどう再分配していくのかを考え効果的に組み立てていくことが重要になる」と述べている。各学校では「生きる力（資質・能力）」を育むために、人的・物的資源をどう捉え、その資源が学校教育活動を実施する際に、なぜ必要なのか等を教師間で共有し、その理由や目的を明確にししながら、「キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）」で活用方法を具体的に考えていくことが、より効果的な取り組みにつながると考える。

(3) 授業改善を柱としたキャリア教育について

県基本方針の中でも、キャリア教育の推進ポイントとして「教科を通じた学び」「地域・企業等と連携した体験活動等を通じた学び」「児童生徒の学びをつなぐ」の3つを示し、学校教育活動全体で取り組むことの重要性を示している。各学校においては、発達段階や学校の実態に応じて、どの学校教育活動を軸として、キャリア教育に取り組むか、教師間で共有しながら組織的・計画的に実施することが重要である。

本研究では、今年度は授業「教科を通じた学び」に焦点を当て実践研究を進めていく。その理由としては授業が学校教育活動の柱であり、子どもたちが最も多くの時間を費やす場となるからである。日々の授業を通して、子どもたちが「できた」「分かった」という自己のよさや可能性を「学び・育ちの実感」として積み重ねながら、「何のために学ぶのか」「その学びを通してこのような力が育った」という「学ぶ意義」を実感できたなら、その日々の授業が「生きる力（資質・能力）」を育む基盤となる。今年度は「カリキュラム・マネジメントタイプ」の中の

「授業のカリキュラム・マネジメント」をキャリア教育の視点で取り組み、授業を通してキャリア教育に関する共通理解や共通認識を図ることで、他の教育活動等の工夫・改善にもつながり、学校教育活動全体の質の向上が図られると考える（図3）。

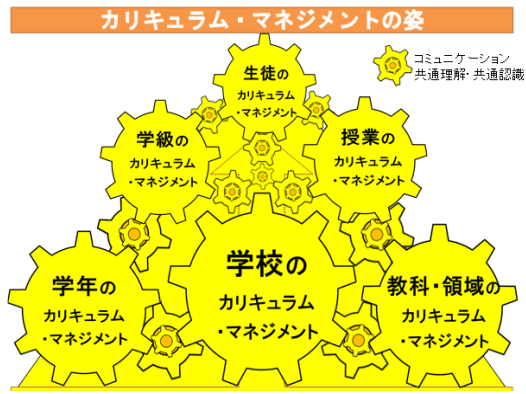


図3 カリキュラム・マネジメントのイメージ

IV 調査研究

1 「キャリア教育」に関するアンケートについて

(1) 調査の目的

「キャリア教育」に関する意識や取り組み状況について、学校（管理者）と教職員に分けて調査を行う。学校（管理者）と教職員の意識を比較することで、認識の共有化が図られているかなど、より本県の現状と課題を把握することができると考える。その調査結果に基づき、分析・考察を行うことで、各学校の「キャリア教育」を実施する際の支援に資することを目的とする。

(2) 調査対象と回答数

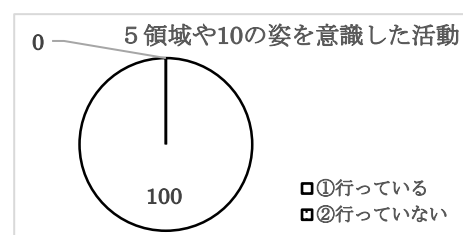
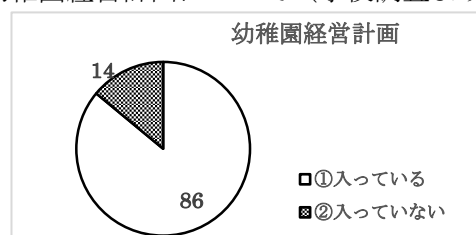
対象 校種	教職員調査	
幼稚園	57 校	76 人
小学校	204 校	634 人
中学校	109 校	308 人
高等学校	45 校	419 人
特別支援学校	15 校	182 人

2 アンケートの結果（全てのグラフの数値は%で示している。）

幼稚園のアンケート結果

【実態調査】

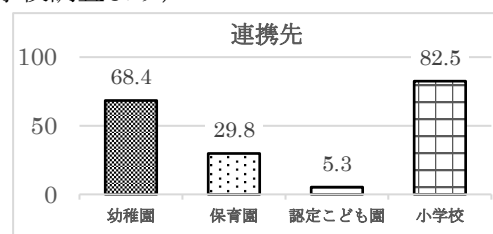
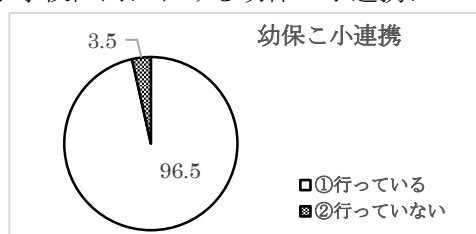
① 幼稚園経営計画について（学校調査より）



『幼稚園経営計画の「努力目標」「経営方針」等に、キャリア教育の視点は入っていますか』との設問に対し、努力目標や経営方針等に、キャリア教育の視点が入っていると答えた幼稚園は、86.0%であった。

『日々の教育活動（遊び、当番活動、幼小接続、異年齢交流など）において、「5領域」や「10の姿」を意識して諸活動を行っていますか』との設問に対し、回答した57園すべてが、取り組んでいるという結果となっている。

② 小学校区内における幼保こ小連携について（学校調査より）

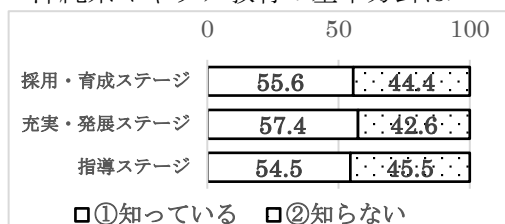


ほとんどの幼稚園が幼保こ小連携を行っている。その連携先としてもっとも多いのが小学校で82.5%、次に68.4%で幼稚園である。小学校との連携は園児と児童の活動のみならず、情報交換や行事を通して、教職員同士の連携も多く行われている。

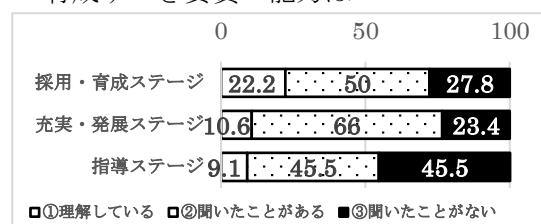
【意識調査】

- ③ 沖縄県教育委員会「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和２年２月）について
（教職員調査より）

沖縄県キャリア教育の基本方針は



「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」
育成すべき資質・能力は



沖縄県公立学校教員等育成指標の「１年から３年前後の採用・育成ステージ」、「８年前後から１３年前後の充実・発展ステージ」、「１８年目前後以降の指導ステージ」の３つに分けて比べてみると、沖縄県キャリア教育の基本方針を知っていると回答した割合はどのステージも５５％前後である。

キャリア教育における育成すべき資質・能力について「①理解している」と最も多く回答したのは採用・育成ステージの２２．２％であった。「①理解している」「②聞いたことがある」と回答した割合が最も高かったのは充実・発展ステージの教職員の７６．６％であった。

【キャリア教育に対する課題や困りごと（自由記述）】（教職員調査より）

幼小中高連携 (15.8%)	・ 小学校・中学校へ向けた幼稚園教育の理解を浸透させること。 ・ どのように連携を図ると良いのかという、アプローチの方法。
10の姿 (10.2%)	・ 「10の姿」について教職員・保護者との連携・共有化。
研修・職員連携 (10.2%)	・ キャリア教育についての研修会を開催してほしい。 ・ 職員での保育の振り返りや共通理解をする時間の確保。校内研修の確保。
キャリア教育 (5.3%)	・ 幼稚園教育の中で、キャリア教育をどのように取り入れていくのか。

小学校のアンケート結果

【実態調査】

- ① 学校経営計画について

学校経営計画の「努力目標」や「経営方針」等に、全ての小学校でキャリア教育の視点を入れた計画を立てている。

- ② キャリア教育の企画や全体計画等の作成に主にかかわる担当や組織について



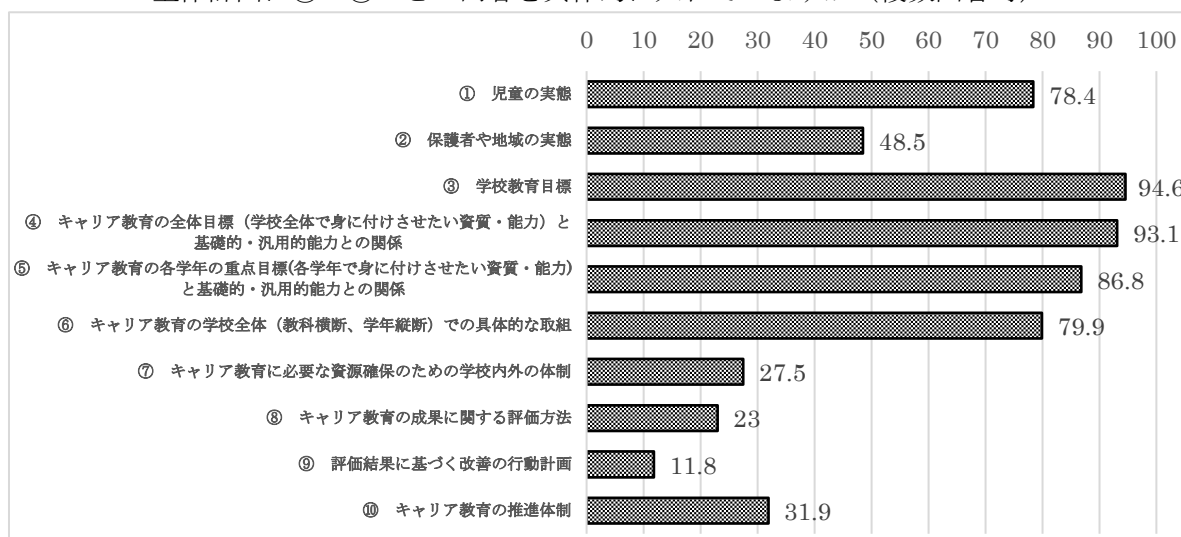
ほとんどの小学校で、中心となって進めるキャリア教育担当を割り当てているが、キャリア教育委員会等が設置されている学校は４２．６％と半分弱となっている。

③ 令和2年度キャリア教育に関する全体計画及び年間指導計画について



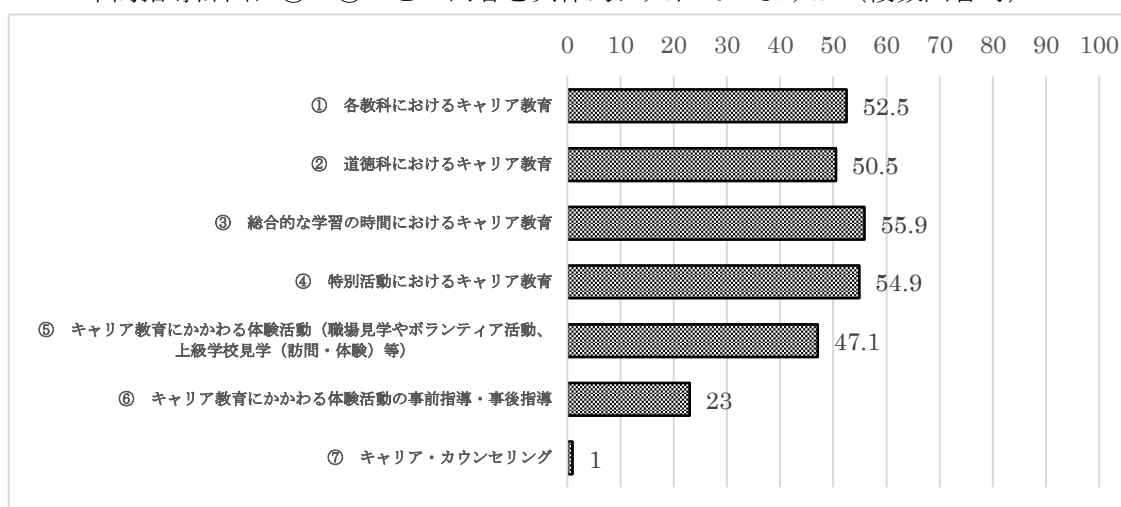
キャリア教育に関する全体計画は、ほとんどの小学校で作成されている。しかし、年間指導計画については、作成されている学校は59.3%、計画中を入れると86.8%である。

全体計画に①～⑩のどの内容を具体的に記入していますか（複数回答可）



①児童の実態、③学校教育目標、④キャリア教育の全体目標（学校全体で身に付けさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係、⑤キャリア教育の各学年の重点目標（各学年で身に付けさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係、⑥キャリア教育の学校全体（教科横断、学年縦断）での具体的な取組の以上5項目については、概ね全体計画の中に入っているが、②保護者や地域の実態48.5%、⑦キャリア教育に必要な資源確保のための学校内外の体制、⑧キャリア教育の成果に関する評価方法、⑨評価結果に基づく改善の行動計画の3項目については、約3割以下になっている。

年間指導計画に①～⑩のどの内容を具体的に記入していますか（複数回答可）

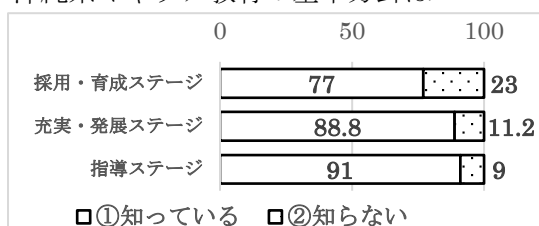


小学校は①～④の項目は5割を超えているが、⑤キャリア教育にかかわる体験活動は47.1%、⑥キャリア教育にかかわる体験活動の事前指導・事後指導は23%、⑦キャリア・カウンセリングは1%と低い値となっている。

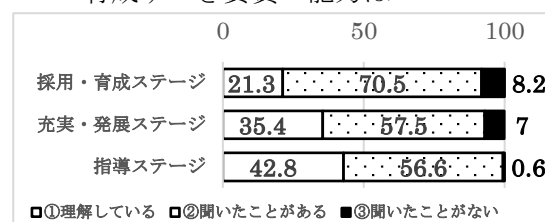
【意識調査】

- ④ 沖縄県教育委員会「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和２年２月）について
（教職員調査より）

沖縄県キャリア教育の基本方針は



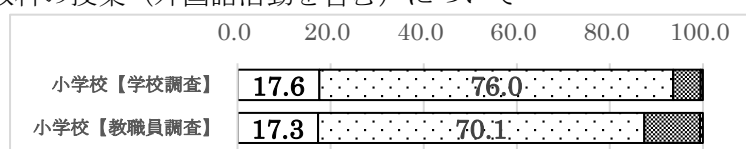
「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」
育成すべき資質・能力は



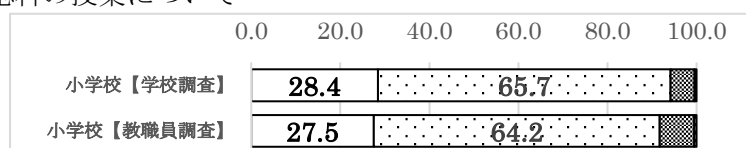
小学校において、「沖縄県キャリア教育の基本方針」や「育成すべき資質・能力の４つの力」の認識度は、キャリアステージが上がるにつれて、「①知っている」「①理解している」の割合が多くなっている。

- ⑤ 「各教育活動において、キャリア教育の視点でどの程度取り組んでいるか」について
学校（管理者）調査と教職員調査との比較を行った。

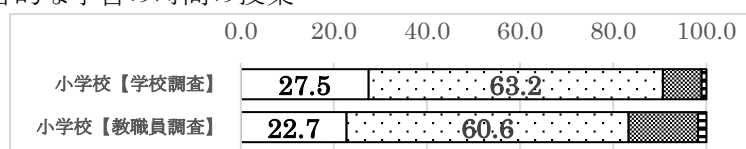
ア) 各教科の授業（外国語活動を含む）について



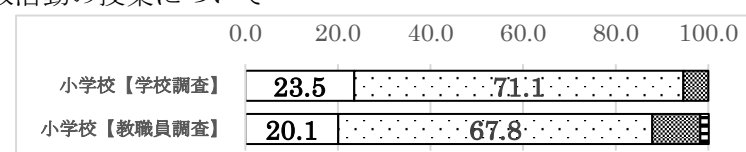
イ) 道徳科の授業について



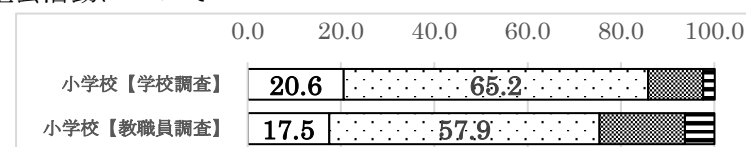
ウ) 総合的な学習の時間の授業



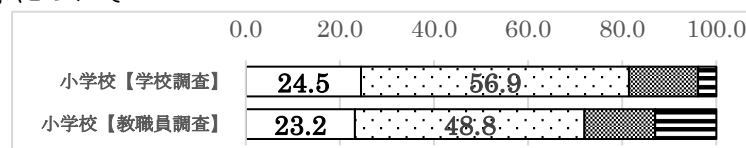
エ) 学級活動の授業について



オ) 児童会活動について



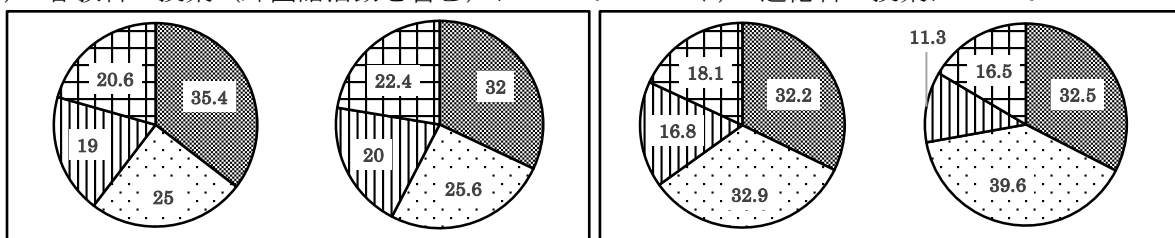
カ) 行事について



全項目において肯定的な回答率が80%を超えており、キャリア教育を意識した取組が実施されている。しかし「よく取り組んでいる」のみの回答率で見てみると、ア)「各教科の授業」について、管理職・教職員共に10%台と低い値となっている。次いで、オ)児童会活動については、教職員において「良く取り組んでいる」の回答率が17.5%と低い値となっている。

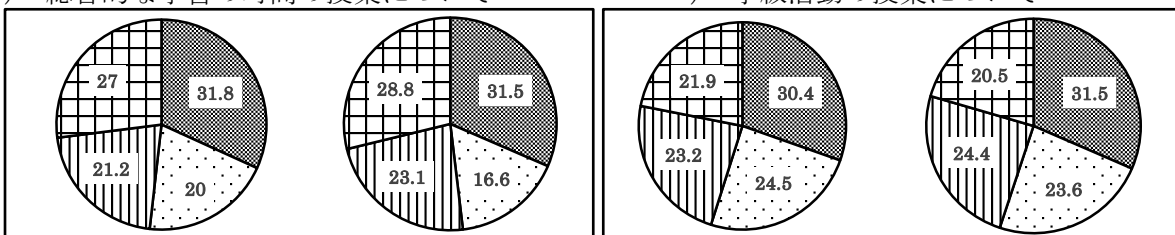
- ⑥ 各教育活動において、キャリア教育の4つの力のどの力を意識して活動していますかについて
学校（管理者）調査と教職員調査との比較を行った（左：学校調査、右：教職員調査）。

ア) 各教科の授業（外国語活動を含む）について イ) 道徳科の授業について



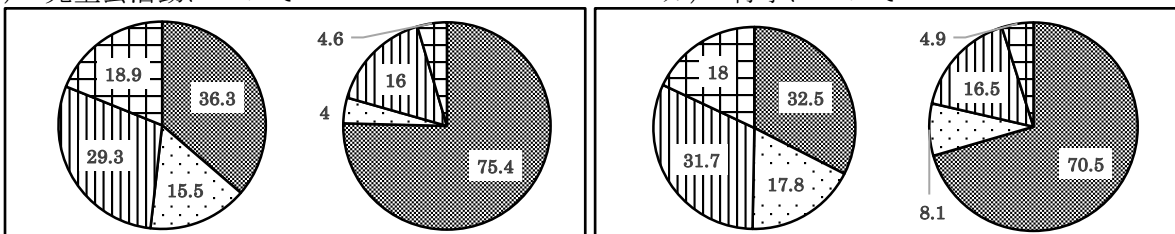
ウ) 総合的な学習の時間の授業について

エ) 学級活動の授業について



オ) 児童会活動について

カ) 行事について



■①かわる力 □②ふり返る力 ▨③やりぬく力 ▩④みとおす力

【キャリア教育に対する課題や困りごと（自由記述）】教職員への調査項目

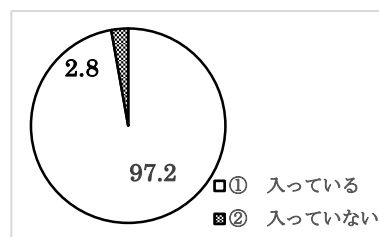
キャリア・パスポート (29.1%)	・キャリア・パスポートの意義を子ども達にどのように伝えていくか。 ・キャリア・パスポートの効果的な活用の仕方について。 ・キャリア・パスポートを推進していく担当がいないと共有化が難しい。
実践例 (28.6%)	・キャリア教育を取り入れた具体的なわかりやすいモデルや資料提供、具体的な授業案が知りたい。 ・特別支援学級在籍児にとってのキャリア教育の充実・・・具体的な事例を知りたい。 ・学ぶことや働くことを「生きる」ことにつなげる具体的な指導方法や取組が知りたい。
外部機関 地域との連携 (9.7%)	・外部講師の招聘の際の時間調整や可能な団体はどこがあるかなどの情報収集。 ・漠然としていてどこから取り組めばいいのかわからないので、学校にキャリア教育コーディネーターがいると良い。
コロナ禍 (9.7%)	・新型コロナウイルス感染の影響により、外部講師を招いたり、現地に行っている学習活動が難しい。 ・今年度はコロナ禍で他学年との交流が難しい。
研修 (6.3%)	・キャリア教育の観点でみた発達段階における適切な指導等の研修会を設ける必要がある。 ・教職員一人一人の、日々の授業にキャリア教育の視点を組み込むことへの意識高揚が課題。 ・キャリア＝仕事という大人の考えを如何にして変えていくかが課題。
時間の確保 (6.3%)	・「どの教科でも取り入れていい」とあるが、時数が決まっている中でどう仕組んでいくかが課題。 ・計画等に割ける時間がなく組織的・意図的な活動を仕組むことが難しい。
4つの力 (2.3%)	・各教科、行事、特別活動、特別の教科道徳など「かわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」はある程度意識して活動できているが、「みとおす力」の意識に課題。 ・4つの力を高めるため、全学年が計画的に指導できる方法がないか。
全体・年間指導計画 (1.7%)	・キャリア教育の4つの視点を各教科年間計画に表記していくこと。
評価(0.6%)	・キャリア教育に取り組んだあとの児童の変容の見取り（評価）。 ・振り返り（評価）の続け方、その頻度を具体的に示してほしい。

中学校のアンケート結果

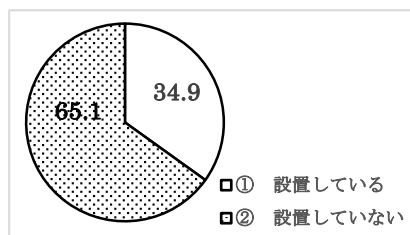
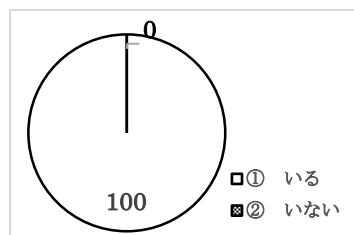
【実態調査】

① 学校経営計画について

学校経営計画の「努力目標」や「経営方針」等に、ほとんどの中学校でキャリア教育の視点を入れた計画を立てている。



② キャリア教育の企画や全体計画等の作成に主にかかわる担当や組織について



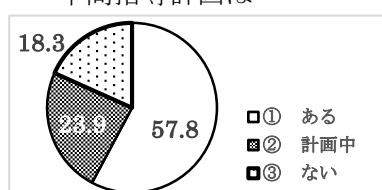
全ての中学校で、中心となって進めるキャリア教育担当を割り当てているが、キャリア教育委員会が設置されている学校は34.9%と低い値である。

③ 令和2年度キャリア教育に関する全体計画及び年間指導計画について

全体計画は

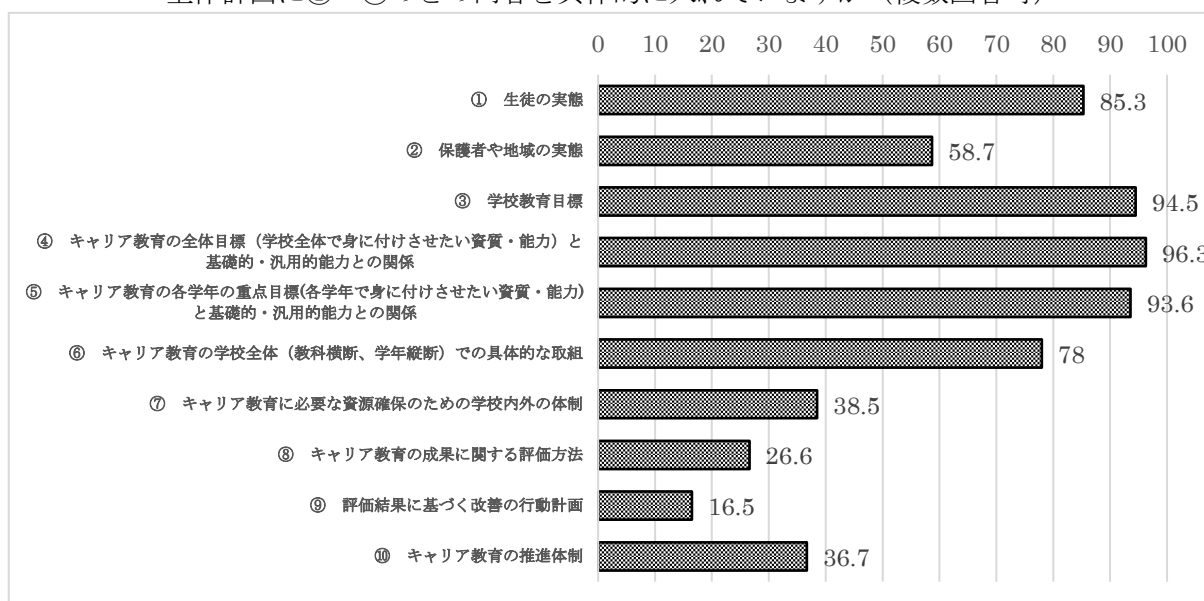


年間指導計画は



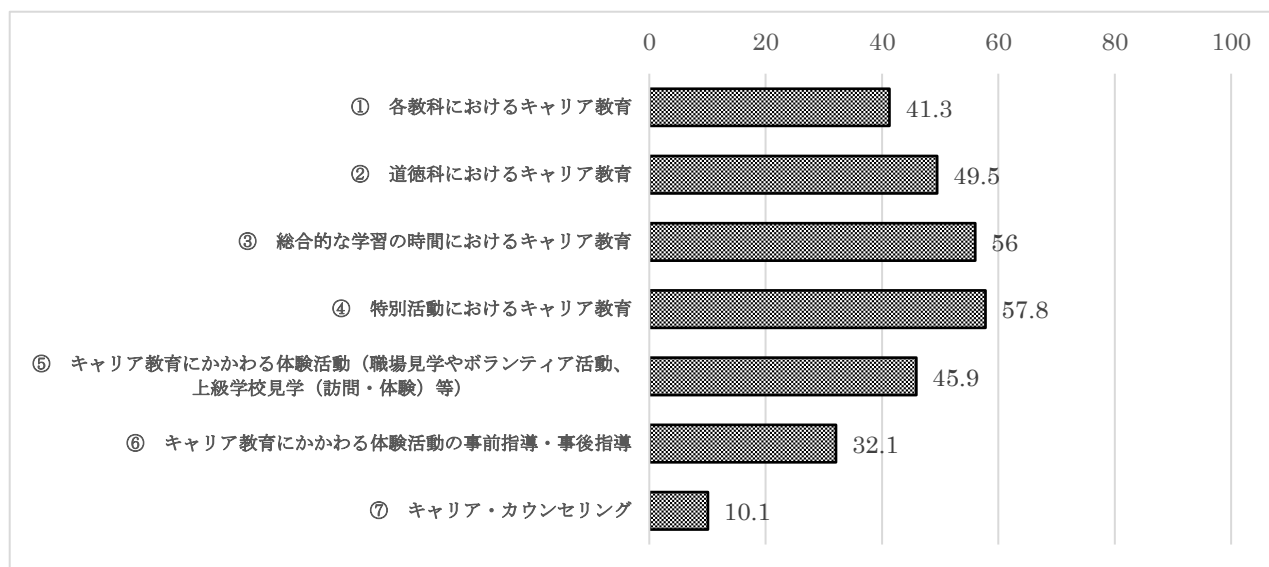
キャリア教育に関する全体計画は、ほとんどの中学校で作成されている。しかし、年間指導計画においては、作成されている学校は57.8%、計画中を入れて81.7%である。

全体計画に①～⑩のどの内容を具体的に記入していますか（複数回答可）



①児童の実態、③学校教育目標、④キャリア教育の全体目標（学校全体で身に付けさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係、⑤キャリア教育の各学年の重点目標（各学年で身に付けさせたい資質・能力）と基礎的・汎用的能力との関係、⑥キャリア教育の学校全体（教科横断、学年縦断）での具体的な取組の以上5項目は、概ね全体計画の中に入っているが、②保護者や地域の実態は58.7%、⑦キャリア教育に必要な資源確保のための学校内外の体制、⑧キャリア教育の成果に関する評価方法、⑨評価結果に基づく改善の行動計画、⑩キャリア教育の推進体制の4項目については、4割以下になっている。

年間指導計画に①～⑩のどの内容を具体的に記入していますか（複数回答可）



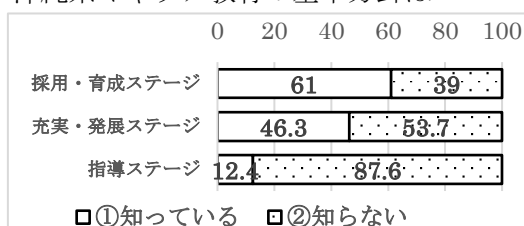
②～④の項目については約5割を超えているが、①各教科におけるキャリア教育が41.3%、⑤キャリア教育にかかわる体験活動が45.9%、⑥キャリア教育にかかわる体験活動の事前指導・事後指導は32.1%、⑦キャリア・カウンセリングは10.1%と低い値となっている。

【意識調査】

④ 沖縄県教育委員会「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和2年2月）について（教職員調査より）

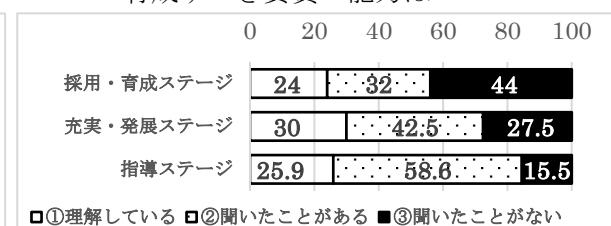
「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」

沖縄県キャリア教育の基本方針は



□①知っている □②知らない

育成すべき資質・能力は

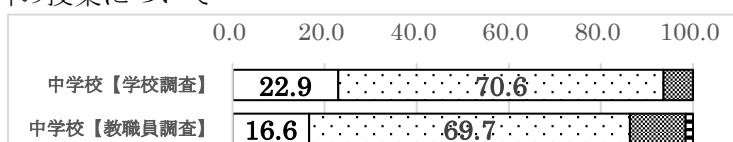


□①理解している □②聞いたことがある ■③聞いたことがない

中学校において、「沖縄県キャリア教育の基本方針」の認識度は、キャリアステージが上がるにつれて「①知っている」という割合が少なくなっている。しかし「育成すべき資質・能力の4つの力」の認識は「①理解している」「②聞いたことがある」を見ると、キャリアステージが上がるにつれて、多くなっている。

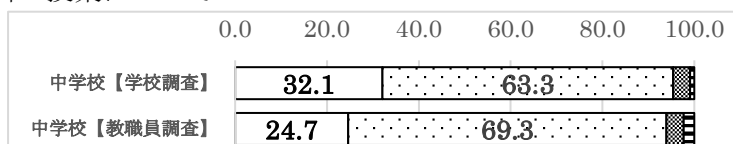
⑤ 各教育活動において、キャリア教育の視点でどの程度取り組んでいるか、学校（管理者）調査と教職員調査との比較を行った。

ア) 各教科の授業について



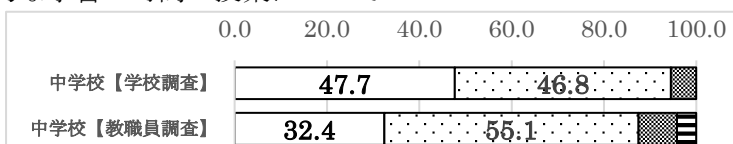
□①よく取り組んでいる
□②どちらかと言えば取り組んでいる
■③どちらかと言えば取り組んでいない
■④全然取り組んでいない

イ) 道徳科の授業について

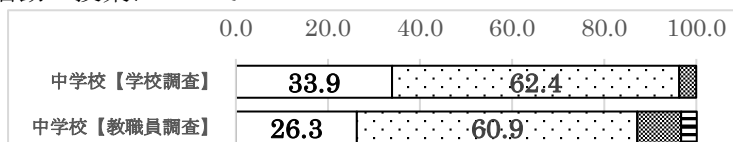


- ①よく取り組んでいる
 □②どちらかと言えば取り組んでいる
 ■③どちらかと言えば取り組んでいない
 ■④全然取り組んでいない

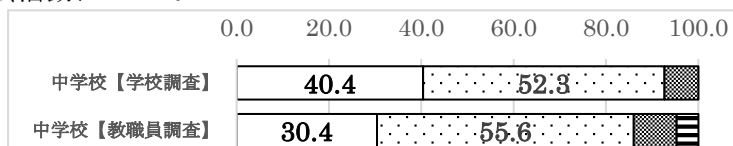
ウ) 総合的な学習の時間の授業について



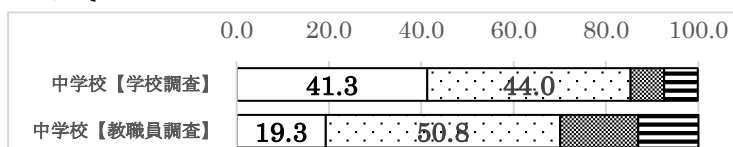
エ) 学級活動の授業について



オ) 生徒会活動について



カ) 行事について

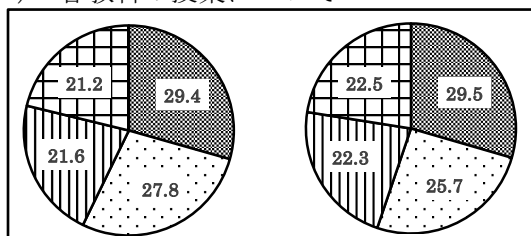


教職員調査の「カ）「行事について」を除けば、どの項目も肯定的な回答率が80%を超えており、キャリア教育を意識した取組が実施されている。しかし、「よく取り組んでいる」のみの回答率で見ると、小学校の結果と同様に「ア）「各教科の授業」について、教職員の回答率が16.6%と最も低い値となっており、次いで行事についての回答率が19.3%と低い値となっている。

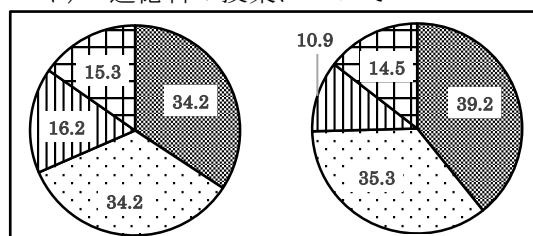
- ⑥ 「各教育活動において、キャリア教育の4つの力のどの力を意識して活動していますか」について、学校（管理者）調査と教職員調査で比較分析を行った。

（左：学校調査、右：教職員調査）

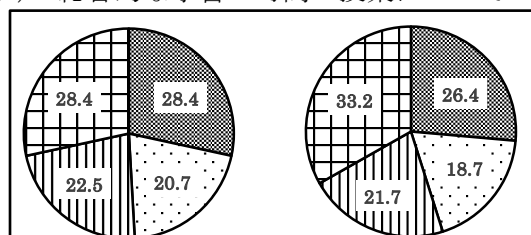
ア) 各教科の授業について



イ) 道徳科の授業について

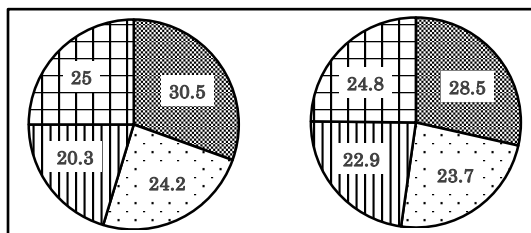


ウ) 総合的な学習の時間の授業について

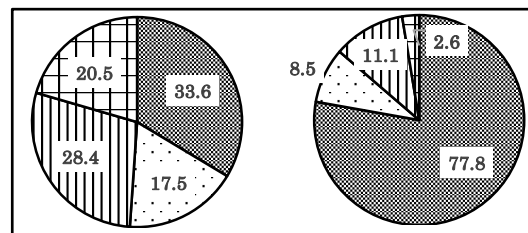


- ①かかわる力
 □②ふり返る力
 ■③やりぬく力
 ■④みとおす力

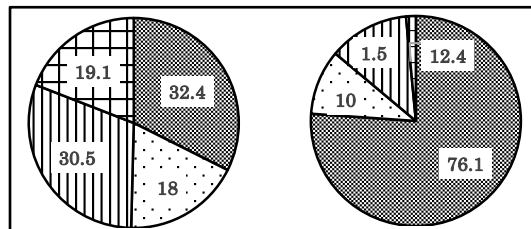
エ) 学級活動の授業について



オ) 生徒会活動について



カ) 行事について



■①かかわる力
□②ふり返る力
▨③やりぬく力
□④みとおす力

ア) 各教科の授業(外国語活動を含む)、イ) 道徳科の授業、ウ) 総合的な学習の時間の授業、エ) 学級活動の授業の4つの教育活動については、管理職・教職員とも「キャリア教育の4つの力」をバランス良く意識して取り組んでいることが分かる。オ) 生徒会活動、カ) 行事の2項目については、教職員の結果において「①かかわる力」が中心になっており、「みとおす力」は1.5%と低い値となっていた。

【キャリア教育に対する課題や困りごと(自由記述)】教職員への調査項目

キャリア・パスポート (23.8%)	・キャリア・パスポートの引き継ぎ方の詳細が知りたい。 ・キャリア・パスポートの具体的な取組方法が知りたい。
研修 (19.8%)	・キャリア教育に関する研修を開催して欲しい。 ・キャリア教育の実践についてもっと勉強する機会が欲しい。 ・学校での取り組みのアドバイスが欲しい。 ・教科間や職員間の「キャリア教育を踏まえた学習活動」について共通認識を図る機会が欲しい。 ・特別活動を要とした実際のキャリア教育の取組方法を学ぶ機会が欲しい。
実践例 (14.9%)	・各教科においての具体例などがもっと欲しい。 ・4つの力に基づいた教材の工夫や実践方法の工夫が知りたい。
コロナ禍(11.9%)	・今年度は、総合的な学習の時間や学校行事が少ないのでキャリア教育を取り入れた教育活動が不十分。
体験活動(8.9%)	・修学旅行や職場体験など、将来を見通した体験活動を実施したい。
時間の確保(6.9%)	・教科の学習改善・指導改善等で時間の確保が難しく、キャリア教育まで意識が回らない。
外部機関(5.9%)	・地域人材を、自分の教科で活用する方法。
全体・年間指導計画 (2.0%)	・授業づくりの際に、視点が多くて指導案が複雑になってしまう。 ・年間指導計画を作成するにあたり、キャリア教育も考慮して作成しなければいけないことが負担。
家庭・保護者との連携 (2.0%)	・家庭へのアプローチ方法に行き詰まることもある。 ・保護者への周知。
生徒との関わり(2.0%)	・個の特性に合わせたキャリア教育の必要性。
4つの力(1.0%)	・すべての教育活動において、4つの力を意識して取り組むことでさらに良くなるのではないだろうか。
評価(1.0%)	・生徒の変容が数字等で見えにくいこと。

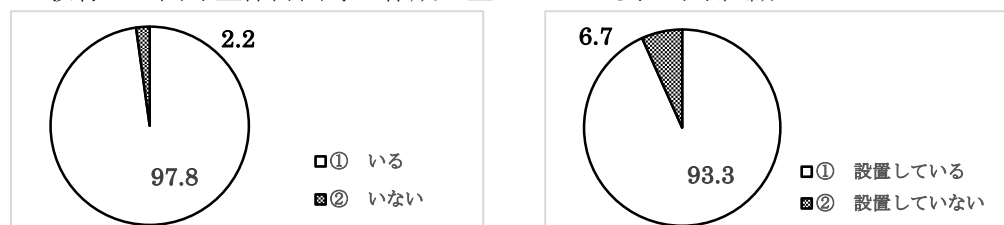
高等学校のアンケート結果

【実態調査】

① 学校経営計画について

学校経営計画の「努力目標」や「経営方針」等に、ほとんどの高等学校でキャリア教育の視点を入れた計画を立てている。

② キャリア教育の企画や全体計画等の作成に主にかかわる担当や組織について



中心となって進めるキャリア教育担当は、ほとんどの高等学校にいる。また、キャリア教育委員会も 93.3%の学校で設置されている。

※ 令和2年度キャリア教育に関する全体計画及び年間指導計画について

高等学校においては毎年 20 校程度の学校が全体計画を作成し、県立学校教育課へ提出することになっているため、来年度までには全体計画の作成率は 100%になる。よって、今回のアンケートでは、高等学校のキャリア教育に関する全体計画と年間指導計画においては、集計しないこととする。

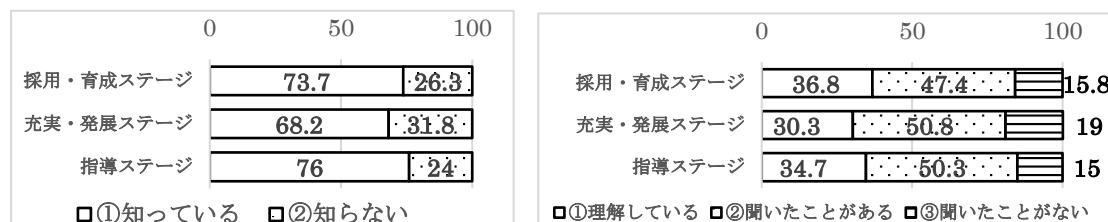
【意識調査】

③ 沖縄県教育委員会「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和2年2月）について

（教職員調査より）

沖縄県キャリア教育の基本方針は

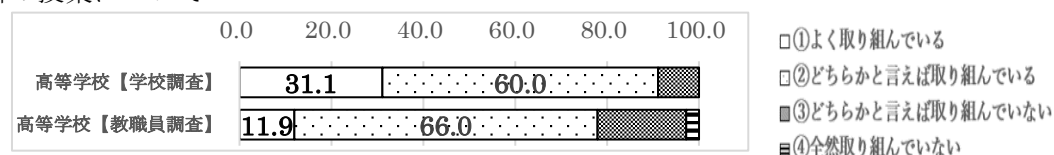
「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」
育成すべき資質・能力は



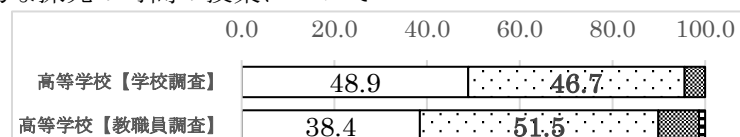
高等学校において、「沖縄県キャリア教育の基本方針」の認知度は、どのキャリアステージでも大きな違いはない。また、「育成すべき資質・能力の4つの力」の認知度も「①理解している」「②聞いたことがある」を見ると、どのキャリアステージでも8割以上を示している。

④ 「各教育活動において、キャリア教育の視点でどの程度取り組んでいるか」について、学校（管理者）調査と教職員調査で比較分析を行った。

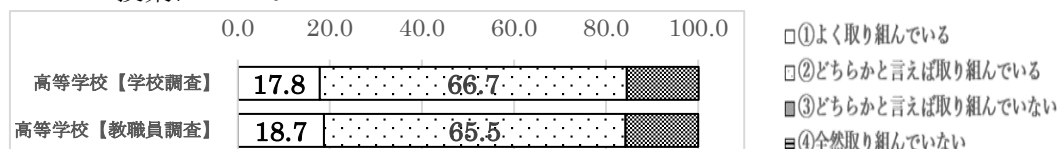
ア) 各教科の授業について



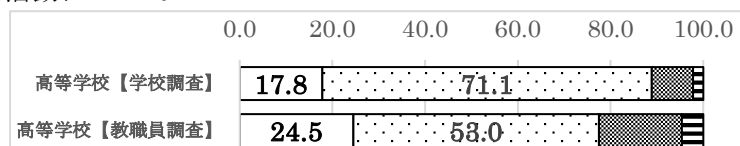
イ) 総合的な探究の時間の授業について



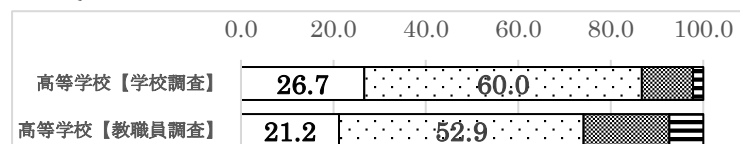
ウ) ホームルームの授業について



エ) 生徒会活動について



オ) 行事について

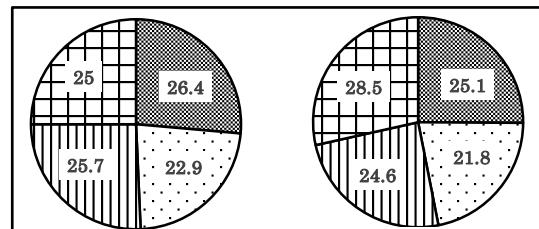
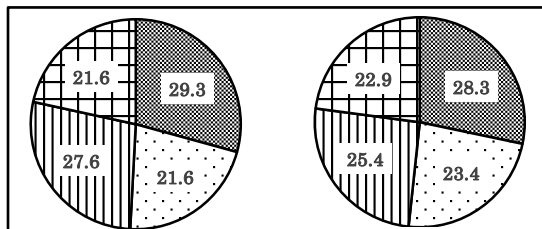


教職員による ア)「各教科の授業」 エ)「生徒会活動」 オ)「行事について」の3項目を除けば、どの項目も、肯定的な回答率が80%を超えており、キャリア教育を意識した取組が実施されている。しかし、「よく取り組んでいる」のみの回答率で見ると、小学校・中学校の結果と同様に ア)「各教科の授業」について、教職員の回答率が11.9%と最も低い値となっており、次いで「ホームルーム活動」の回答率が18.7%と低い値となっている。「ホームルーム活動」「生徒会活動」については、管理職の「よく取り組んでいる」回答率も低く、17.8%となっていた。

- ⑤ 「各教育活動においてキャリア教育の4つの力のどの力を意識して活動していますか」について 学校（管理者）調査と教職員調査で比較分析を行った（左：学校調査、右：教職員調査）。

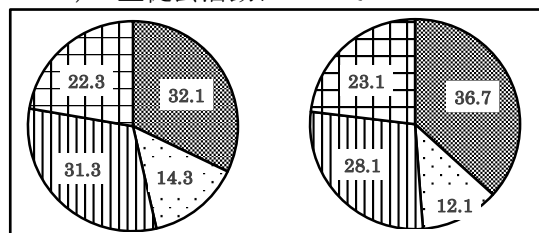
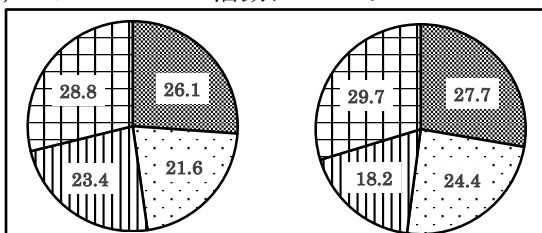
ア) 各教科の授業について

イ) 総合的な探究の時間の授業について

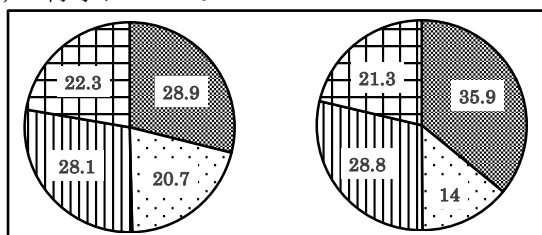


ウ) ホームルーム活動について

エ) 生徒会活動について



オ) 行事について



- ①かわる力
- ②ふり返る力
- ▨ ③やりぬく力
- ▤ ④みとおす力

どの教育活動においても、管理職・教職員とも「キャリア教育の4つの力」をバランス良く意識して取り組んでいることが分かる。ア)「各教科の授業」においては、「ふり返る力」と「みとおす力」が他の2つの力に比べて、少し意識が低くなっている。エ) 生徒会活動、オ) 行事の2項目においても同様のことがいえるが、特に「ふり返る力」が管理職・教職員共に20%弱と低い値となっている。

【キャリア教育に対する課題や困りごと（自由記述）】教職員への調査項目

研修 (19.6%)	・今後キャリア教育の視点に立った学校活動も必要になってくると思う。もっと勉強する機会が欲しい。 ・キャリア・カウンセリングに関する知識やスキル、コミュニケーションをとるための方法の習得など、教職員が基礎的なキャリア・カウンセリングが行えるような研修体制の構築。
実践例 (17.3%)	・キャリア教育についてP D C Aサイクルを取り入れた見本となる実践事例が欲しい。 ・各教科において、どのような取り組み、活動例があるのか、情報が欲しい。 ・基本方針の資料などをもっと活用できるような形で紹介して欲しい。 ・個の特性に合った生徒への効果的なアプローチ方法が知りたい。
時間の確保 (10.5%)	・生徒に関わる時間の確保。 ・学校全体で目標を確認する時間の確保。
共通確認 (9.0%)	・キャリア教育全般で、学校全体で共通理解を図る場が必要。 ・次年度のキャリア教育年間計画などを立てる際に、全職員の意識の共有化が必要。 ・探究的な学習はキャリア教育を実践できる有効な学習だと思うので、教員の共通理解を図りたい。
コロナ禍(6.8%)	・コロナ禍における各教育活動（行事）の見直しで、変更や中止となって、実施できないことが多かった。
キャリア・パスポート (6.0%)	・キャリア・パスポートについて職員の共通理解。 ・キャリア担当や割り当て時間も決められていなくて、どのような実施ができるか不安感がある。 ・一人一人のキャリア・パスポートにコメントを書くための時間確保。
インターンシップ (6.0%)	・発達段階に応じたインターンシップの効果的な取組。
外部機関 (3.0%)	・地域の人材と連携するための企画・調整等が難しい。県で連携・調整するような機関を設置して欲しい。 ・もっと地域と繋がる活動がしたい。 ・課題解決能力を育成するため、地域活性化に繋がるプロジェクトをさせたい。
職業教育 (3.0%)	・キャリア教育＝職業教育と思っている方が多いのでは。 ・生徒指導部のHR係や生徒会顧問が関わって取組を実施したい。
小中高連携 (2.3%)	・小中学校との情報を共有できる環境。 ・小中学校との連携が必要。
進学指導 (2.3%)	・授業等で社会と学びをつなげる必要性。 ・授業が受験勉強に偏ったものであるため、キャリア教育が浸透していない状況である。
4つの力 (1.5%)	・生徒個々の能力や資質に応じたキャリアプランの計画と遂行。 ・4つの力は、どの教育活動にも入れて取り組んでいるが、学年ごとにステップアップする具体的な指導内容が知りたい。
校内体制の構築 (1.5%)	・学校全体で協議を行い、キャリア教育について責任を持って計画し、推進する部署や係の設置。

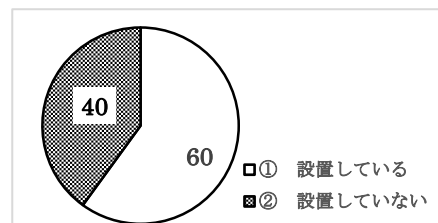
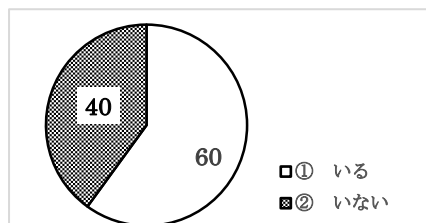
特別支援学校のアンケート結果

【実態調査】

① 学校経営計画について

学校経営計画の「努力目標」や「経営方針」等に、ほとんどの特別支援学校でキャリア教育の視点を入れた計画を立てている。

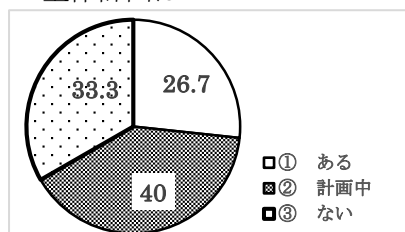
② キャリア教育の企画や全体計画等の作成に主にかかわる担当や組織について



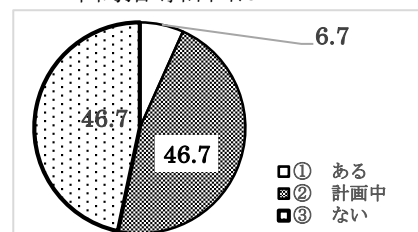
キャリア教育担当・キャリア教育委員会を単独設置しておらず、他の分掌と兼ねているため、担当や組織があると回答した割合は6割程度となっている。

③ 令和2年度キャリア教育に関する全体計画及び年間指導計画について

全体計画は



年間指導計画は



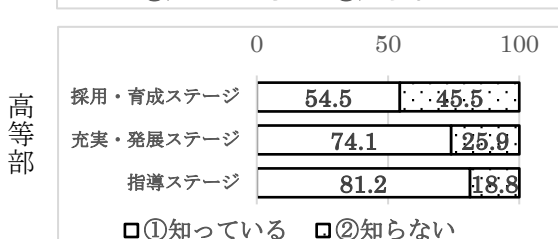
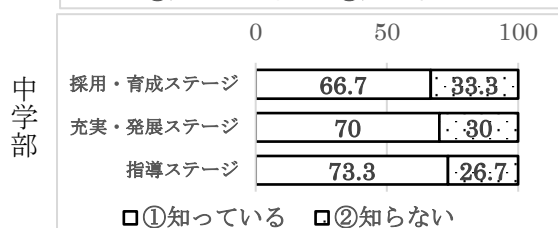
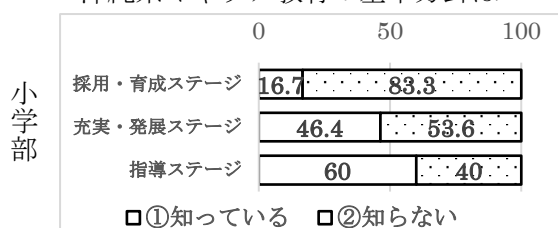
キャリア教育に関する全体計画と年間指導計画の作成については、作成している学校が少ない結果となっている。

【意識調査】

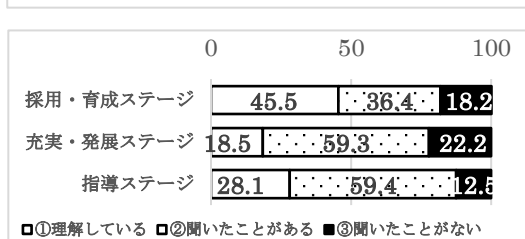
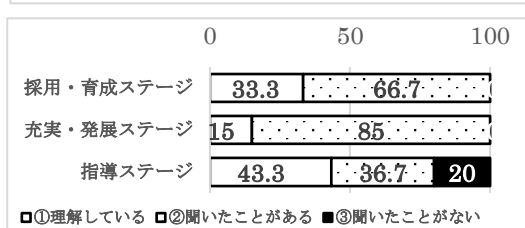
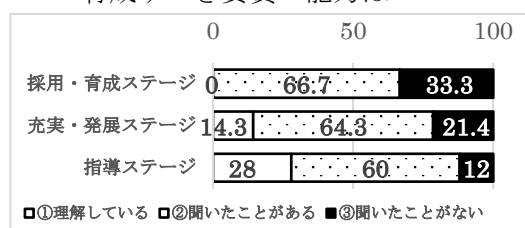
④ 沖縄県教育委員会「沖縄県キャリア教育の基本方針」（令和2年2月）について（教職員調査より）

「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」

沖縄県キャリア教育の基本方針は



育成すべき資質・能力は

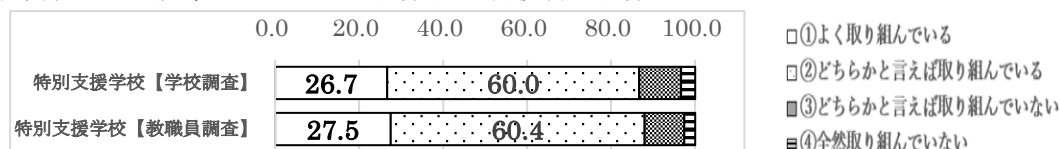


特別支援学校において、「沖縄県キャリア教育の基本方針」の認識度は、どの学部もキャリアステージが上がるにつれて、「①知っている」という割合が高くなっている。「育成すべき資質・能力の4つの力」の認識において肯定的な回答率が70%を超えている。

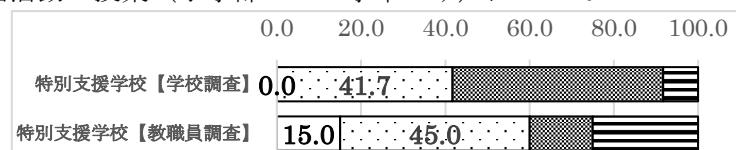
【意識調査】

- ⑤ 各教育活動において、キャリア教育の視点でどの程度取り組んでいるかについて
学校(管理者) 調査と教職員調査で比較分析を行った。

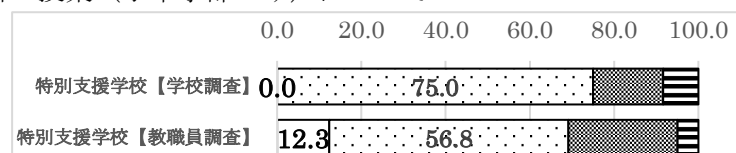
ア) 各教科等合わせた指導の形態による授業及び各教科の授業について



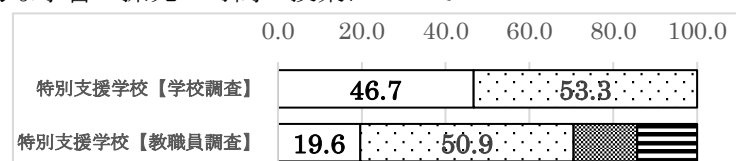
イ) 外国語活動の授業（小学部3・4学年のみ）について



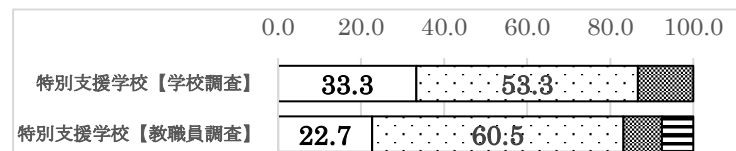
ウ) 道徳科の授業（小中学部のみ）について



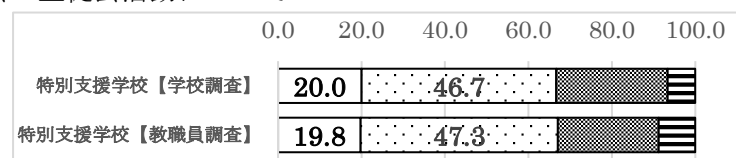
エ) 総合的な学習・探究の時間の授業について



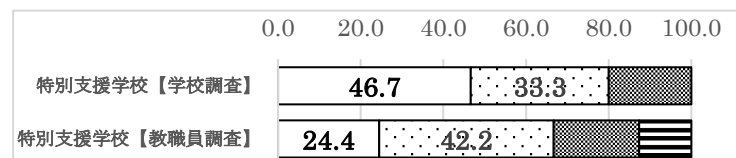
オ) 学級活動・ホームルームの授業について



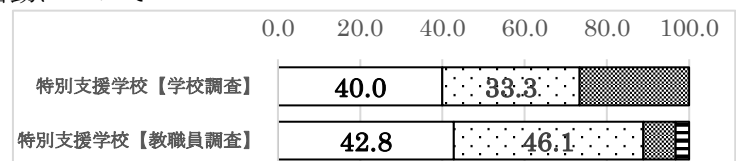
カ) 児童会・生徒会活動について



キ) 行事について



ク) 自立活動について



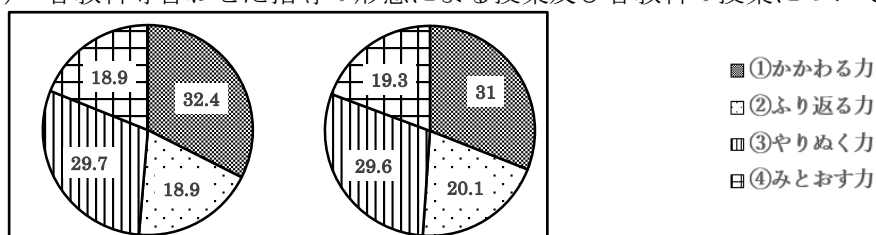
知的障害を有する特別支援学校の教育課程では、小学部の外国語活動の授業において、児童や学校の実態を考慮の上、必要に応じて設けることができる。よって、小学部のイ) 外国語活動の数値が他の教育活動よりも低い値となっている。

子どもの活動が中心となる児童会（生徒会）活動では、管理職・教職員共にやや低い値となっている。行事については、管理職と教職員の値に10%以上の差が見られた。

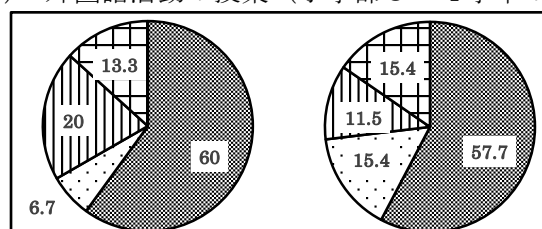
- ⑥ 「各教育活動においてキャリア教育の4つの力のどの力を意識して活動していますか」について、学校（管理者）調査と教職員調査で比較分析を行った。

（左：学校調査、右：教職員調査）

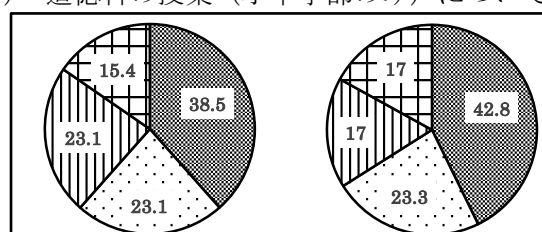
- ア) 各教科等合わせた指導の形態による授業及び各教科の授業について



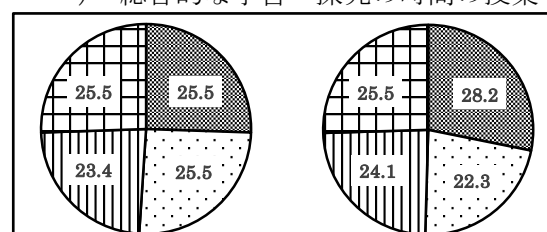
- イ) 外国語活動の授業（小学部3・4学年のみ）について



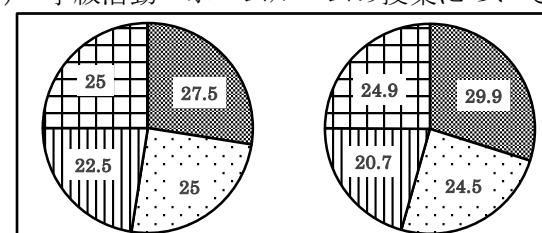
- ウ) 道徳科の授業（小中学部のみ）について



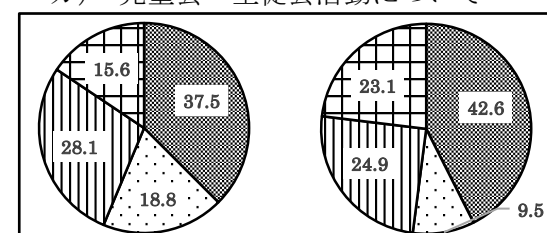
- エ) 総合的な学習・探究の時間の授業



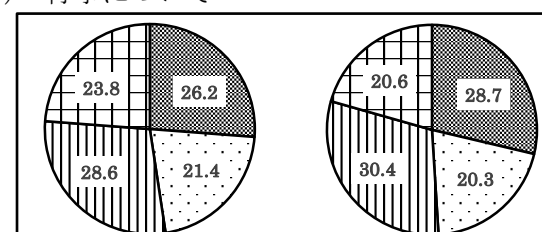
- オ) 学級活動・ホームルームの授業について



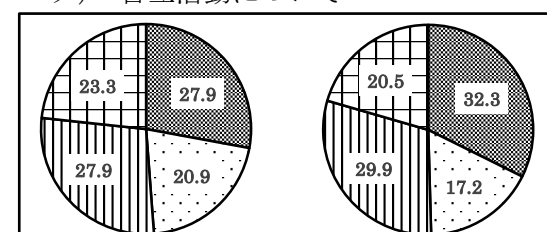
- カ) 児童会・生徒会活動について



- キ) 行事について



- ク) 自立活動について



ア) 各教科の授業（外国語活動を含む）、エ) 総合的な学習（探究）の時間、オ) 学級活動（ホームルーム活動）の授業、キ) 行事、ク) 自立活動の教育活動においては、管理職・教職員とも「キャリア教育の4つの力」をバランス良く意識して取り組んでいることが分かる。

イ) 外国語活動、ウ) 道徳、カ) 児童会（生徒会）活動においては、「①かかわる力」を意識した取組が中心となっていることがわかる。

【キャリア教育に対する課題や困りごと（自由記述）】教職員への調査項目

研修 (24.8%)	・キャリアを意識した職員の意識改革が必要だと思うので研修が必要。 ・教科を重視した教育課程が編成されているが、「教科学習＝座学」という固定概念が強い。 ・今取り組んでいる教育活動がキャリア教育とつながっているのか、不安である。 ・小学部の低学年の段階からキャリア発達の視点を踏まえて教育を行うことが重要。 ・「キャリア教育」について全職員で協議したり、生徒のキャリア発達について情報を共有する機会の確保。
キャリア・パスポート (16.4%)	・キャリア・パスポートの活用意義について、学校全体で確認する機会が必要。 ・キャリア・パスポートの周知が必要。 ・校務支援システムの内容とどう関連付けていくか。 ・既存の個別の支援計画の充実を図り、キャリア・パスポートと関連付けていく方法。
共通確認 (10.9%)	・教職員間の意識の向上を図るため、全体での共通確認が必要。 ・本人を取り巻く環境が広範囲なため、その役割分担やケース会議の持ち方など、障害種に合わせた支援の方法。 ・現在、個人での取り組みになっている。学校としてキャリア教育にどのように取り組むか。
実践例 (9.1%)	・障害種に合わせた事例や参考資料等の情報を、HPで見えるような形で共有化を希望。 ・重複クラスの生徒にも取り入れられるキャリア教育の教育活動の具体的な指導例。
4つの力(7.3%)	・キャリア教育での身に付けさせたい力を意識して行うのと分からないで教えるのでは効果が違ってくると思う。
個々に合わせたキャリア教育 (7.3%)	・児童生徒の重度重複化に伴い、個々の実態に合わせたキャリア教育の目標設定、実施。
小中高連携(5.5%)	・学部にもたがる連携強化。
校内体制の構築(3.6%)	・幅が広い活動であることから、主体となる部署（学部分掌や校務分掌）がハッキリしていない。
職場体験・インターンシップ (3.6%)	・早期から卒業後を意識した取り組みが必要。 ・保護者との連携した取組。
全体・年間指導計画 (3.6%)	・「個別の指導計画」とつながりのある教育課程。 ・障害の重い児童生徒に対し、全体計画をどう作成すれば良いのか。

3 アンケート結果の分析と考察

(1) 幼稚園のアンケート結果の分析と考察

幼稚園においては、幼稚園の経営計画の「努力目標」「経営方針」にキャリア教育の視点を入れている幼稚園が86%、「5領域」「10の姿」を意識して諸活動を行っているかのアンケート結果が100%とどちらも高い割合であった。さらに「5領域」「10の姿」と「キャリア教育」の関連性を明確にしていくことが、子どもたちの変容を見取る際の具体的な視点にもつながると考える。

自由記述によると、様々な取り組みに関する連携や共有の部分で課題を感じているようである。園内研修や外部機関を利用した研修を行い、現在の取り組みがキャリア教育とどう関係するのか、教職員間や保護者との共通理解を図ることで、キャリア教育の推進につながると考える。

(2) 小学校・中学校の全体計画・年間指導計画の分析と考察

今回の調査で、小学校・中学校において同様の結果となったので、合わせて分析・考察を行った。全ての小学校・中学校で学校経営計画の中に、キャリア教育の視点を入れた計画を立てている。またキャリア教育の全体計画もほぼどの学校でも作成されている。そのような中で年間指導計画が作成されている学校は6割弱となっている。多くの学校で設置されているキャリア教育担当を中心に、学校経営計画や全体計画に基づいた年間指導計画の作成が、今後のキャリア教育の推進につながると考える。今回全体計画の内容項目として含まれる割合が3割以下と低かった⑦から⑨項目に関しては、キャリア教育を推進するに当たって大切な視点となる。保護者や外部機関と連携した「人的・物的資源」リスト等を学校で作成し、そのリストの活用を全体計画に明記することで、組織的・計画的なキャリア教育の推進が図られると考える。さらに⑧項目の評価方法や⑨項目の改善に向けた行動計画までを見通して全体計画を作成することで、より活用できる全体計画になると考える。今後全体計画の項目を見直ししながら改善していくことが望まれる。

年間指導計画の内容項目では、「体験活動の事前・事後指導」「キャリア・カウンセリング」の2項目が低い値となった。体験活動を効果的に実施するためにも、年間指導計画に事前・事後指導を明記することで、意図的にキャリア教育で身に付けさせたい4つの力を育んでいくことができると考える。

県基本方針の中では発達の段階に応じた体系的なキャリア教育として到達イメージを小学校では「将来の夢を描くことができる」、中学校では「自己理解に基づく進路選択ができる」と示している。現在実施されている教育相談の中に、「キャリア・カウンセリング」の視点も位置付け、年間指導計画の中に明記することで、教職員が子どもたちの学びと社会を接続するという意識の向上にもつながり、小学校・中学校の到達イメージにつながる学校全体のキャリア教育の推進が図られると考える。

(3) 小学校・中学校の意識調査の分析と考察

各教育活動において、キャリア教育の視点でどの程度取り組んでいるかの意識調査では、小・中学校でどの項目も肯定的な回答率が80%を超えており、キャリア教育を意識した取り組みが実施されている。しかし「よく取り組んでいる」のみの回答率で見ると、(ア)「各教科の授業」について、小学校では管理職・教職員共に10%台、中学校では教職員が16.6%と低い値となっている。最も多くの時間で関わる「各教科の授業」を「自己の学びと社会をつなぐ場」というキャリア教育的な視点を持ち、意識して取り組むことが、キャリア教育の促進につながると考える。次に低い値となったのが小学校では教職員における「児童会活動」、中学校では教職員における「行事」である。今回の学習指導要領では「特別活動を要としたキャリア教育の充実」が示されている。特別活動の時間を、各教科等や行事などの様々な教育活動をつなぐ場として充実させていくことが、教育活動の質の向上につながり、キャリア教育の推進にもつながると考える。

ア) 各教科の授業(外国語活動を含む)、イ) 道徳科の授業、ウ) 総合的な学習の時間の授業、エ) 学級活動の授業の4つの教育活動においては、管理職・教職員とも「キャリア教育の4つの力」をバランス良く意識して取り組んでいることが分かる。オ) 児童会活動(生徒会活動)、カ) 行事の2項目においては、教職員の意識は、「①かかわる力」が中心になっている。児童会活動(生徒会活動)や行事においては「かかわる力」を最も育むことのできる機会ではあるが、学校(管理者)は4つの力をバランスよく意識していることから、活動ありきとならないように、計画の段階か

から見通しを持たせ、その活動のふり返りをしっかりと行うことで、子どもたちの学ぶ意義が明確になり、学校教育活動の質の向上につながると考える。特別活動の中でキャリア教育の4つの力を意識して取り組むことが、今後重要となってくる。

(4) 高等学校の意識調査の分析と考察

教職員による(ア)「各教科の授業」(エ)「生徒会活動」(オ)「行事について」の3項目を除けば、どの項目も肯定的な回答率が80%を超えており、キャリア教育を意識した取り組みが実施されている。しかし「よく取り組んでいる」のみの回答率で見ると、小学校・中学校の結果と同様に(ア)「各教科の授業」について、教職員の回答率が11.9%と最も低い値となっており、次いで「ホームルーム活動」の回答率が18.7%と低い値となっている。「ホームルーム活動」「生徒会活動」については、管理職の「よく取り組んでいる」回答率も低く、17.8%となっていた。小学校・中学校同様に、最も多くの時間で関わる「各教科の授業」を「自己の学びと社会をつなぐ場」というキャリア教育的な視点を持ち意識して取り組むことが、キャリア教育の促進につながると考える。次に低い値となった「ホームルーム活動」も特別活動である。小学校・中学校同様、特別活動の時間を、各教科等や行事などの様々な教育活動をつなぐ場として充実させていくことが、教育活動の質の向上につながり、キャリア教育の推進にもつながると考える。

高等学校においてはどの教育活動においても、管理職・教職員とも「キャリア教育の4つの力」をバランス良く意識して取り組んでいることが分かる。(ア)「各教科の授業」においては、「ふり返る力」と「みとおす力」が他の2つの力に比べて、少し意識が低くなっている。エ) 生徒会活動、オ) 行事の2項目においても同様のことがいえるが、特に「ふり返る力」が管理職・教職員共に20%弱と低い値となった。各教科の授業の中で「何のための学び」という見通しを持ち、単元終了の際には自己の学びを「ふり返えらせる」取り組みが、子どもたちの学びと社会との接続の部分につながると考える。生徒が実際活動する場面の多い「生徒会活動」や「行事」を小・中学校同様、活動のみで終わることのないよう、教職員が意識して「ふり返る力」を活用させることで、自己の成長を感じるなどの「学び・育ちの実感」を高めることができると考える。

(5) 特別支援学校の意識調査の分析と考察

特別支援学校においては、管理職・教職員共にキャリア教育の視点をバランス良く意識して取り組んでいる。しかし、外国語活動、道徳科、児童会(生徒会)活動では「かかわる力」を中心に教育活動が行われていることが分かった。これらの教科や活動では、「かかわる力」を育むことができる機会が多い活動ではあるが、子どもの経験や体験を活動のみで終わらせることなく、子どもの実態に応じて、見通しを持たせたり、活動後のふり返しを行ったりすることで、学校教育活動全体の質の向上につながり、キャリア教育の推進につながると考える。

4 今後に向けて

今回の調査で見えた特徴としては、どの学校種においても特別活動を実施する際に、「かかわる力」の意識が高く、「みとおす力」や「ふり返る力」の意識が低い結果となった。答申(平成28年)では「学級活動やホームルーム活動を通じて、各教科等における学習の内容や、特別活動における様々な活動や行事の内容を見通したり振り返ったりし、自己の生き方・キャリア形成につなげていく役割が期待されている。」と示し、それを受け総則では「特別活動を要としつつ各教科(科目)等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と示している。さらに藤田晃之(2019)は、特別活動の「要とは、扇の骨を止める部分で、扇面がバラバラにならないようつなぐ役割を果たしています。(中略) 要の位置に自分を置き、『この学びとこの学びはつながっていて、気づきを与えてくれる』とか、『これは私にとって意味ある学びだったんだ』など、教科等と自分を往還しながら、実生活や自分の将来に引きつける。それが『特別活動を要としつつ』ということだと、私は考えています。」と述べている。

特別活動の中で、子どもたちがそれぞれの教科等と自分を往還しながら、様々な教育活動をふり返り、自己のよさや可能性に気づいたり、次への見通しを持ちながらやりぬく大切さを実感したりできるよう、「キャリア教育の4つの力」を意識した特別活動の充実が図られていくことがキャリア教育の推進につながると考える。

V 実践研究

今回改訂された学習指導要領では、「身に付けさせたい資質・能力」を育むためには、授業を単発的に捉えるのではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通しふり返る場面をどこに設定するのか、対話する場面をどこに、どのように設定するのか等、大きなまとまりとして捉える重要性を示している。各学校では、大きな枠の中で「キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）」で、子どもたちのキャリア形成に関する課題を明確にしたり、学校教育目標と照らし合わせたりして、その単元で身に付けさせたい力を明確にすることが重要である。そして教材分析や授業展開を考える際に、「キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）」を「学び・育ちの実感」を育むための具体的な授業改善の視点として捉え、計画・実践していくことが大切であり、そのような視点で行われる授業改善は、ひいては「主体的・対話的で深い学び」の授業実現へとつながっていくと考える。

「キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）」は答申（平成23年）において、「この4つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべてのものが同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。」と示している。各学校においては、4つの力を均一に身に付けさせようとするのではなく、子どもたちの実態に合わせて、重点化・焦点化を図ることが大切である。4つの力は相互に関連・依存している関係にあるので、一つの力を身に付けさせようと意識すると、自ずと関連・依存しながら連なって身に付いていく力だと考え、授業改善の中で身に付けさせたい力として重点化したり、授業の中で活用させる力や視点として焦点化したりすることが大切である。

本研究では、以上の理論に基づいた実践研究を研究協力校（表6）、研究協力員（表7）と共に進め、次ページ以降で実践研究を紹介している。今年度は、各学校においてキャリア教育の理解が進み、「教科を通じた学び」の中でキャリア教育の推進が図られるよう、「一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育ガイド」としてリーフレットを作成した。さらに、そのリーフレットや3つ目の研究の柱である各校種の実践事例を、本総合教育センターのWebサイトよりデータでダウンロードできるように掲載し、各学校等が実態に合わせて活用できるようにしている。

表6 研究協力校

研究協力校	研究協力員	実践研究	掲載
宜野湾市立宜野湾小学校 校長 松村 徹	教諭 玉里 真紀	主体的に学習に取り組む態度の育成 ～キャリア教育の視点を生かした授業づくり～	実践事例1 (P27～33)
	教諭 花城 あゆみ		
県立名護特別支援学校 校長 徳永 盛之	教諭 又吉 潤	販売製品づくり（農耕園芸班・窯業班・木工班・手工芸班・クラフト班・チャレンジ班）を通して	実践事例集 (Web 掲載)

表7 研究協力員

研究協力員	所属校	実践研究	掲載
教諭 新垣 元子	宜野湾市立 真志喜 中学校	自分の考えを表現できる生徒の育成 ～語彙力育成を中心に～	実践事例2 (P34～37)
教諭 仲地 真紀	県立 中部商業 高等学校	他者を理解し、伝え合うことができる 生徒の育成 ～効果的なインタビュー方法と まとめ方の工夫を通して～	実践事例3 (P38～40)

実践事例1

A小学校

主体的に学習に取り組む態度の育成

～キャリア教育の視点を生かした授業づくり～

学校紹介

学校教育目標(重点目標・目指す生徒像)

☆よく考える子

(自ら課題を持ち、自ら考え、主体的に行動できる児童を育てる)

☆じょうぶな子

(健康で強い意志と実践力のある児童を育てる)

☆思いやりのある子

(礼儀正しく、情操豊かな児童を育てる)

☆すすんで働く子

(みんなのためにすすんで働く児童を育てる)



今回の「キャリア教育」(取り組み)のねらい

授業の中で身に付けさせたい力を育成するために以下の3つのポイントで授業改善を進める。

- ①身に付けさせたい資質・能力の明確化
- ②学ぶ意義の明確化
- ③「学び・育ちの実感」の積み重ね

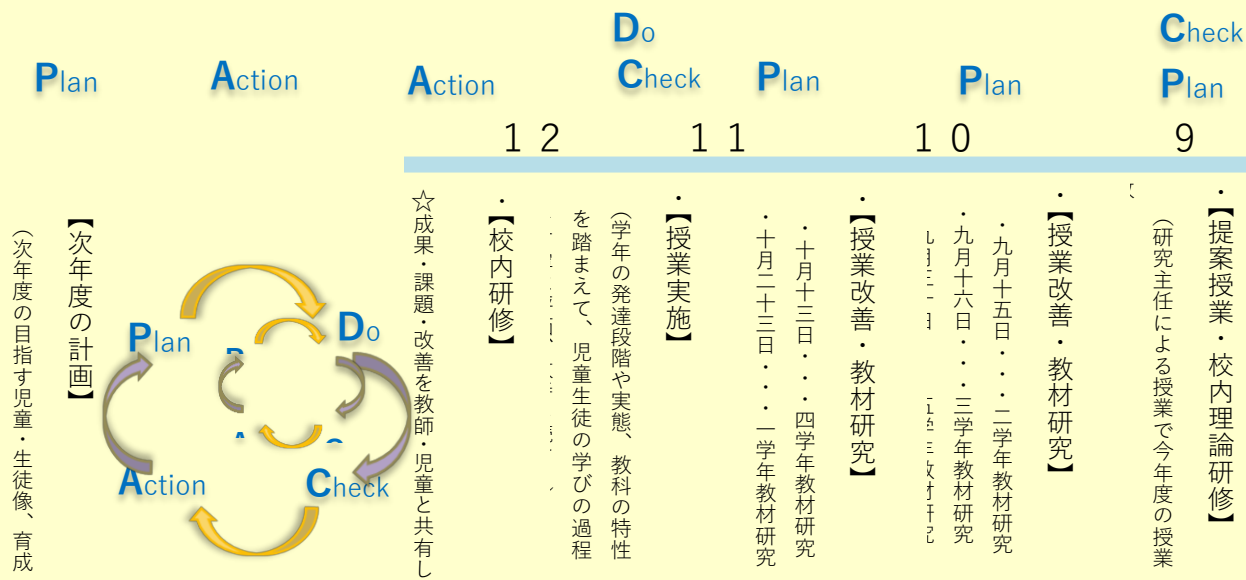
キャリア教育の4つの力

「か・ふ・や・み」で授業を具体化

三つの側面

- ①教科等横断的な視点(「単元配列表」を作成・活用し、学ぶ意義を明確にし、児童と共有)
- ②PDCA サイクル(丁寧な実態把握で指導と評価を一体化)
- ③人的物的資源の活用(内・外の人材活用で、学校内・行政等と連携した実践)

学校の1年間の流れ



Plan

1. 子どもたちの実態・目指す児童像を「か・心・や・み」で具体化

「学校教育目標(目指す児童像)」に照らし合わせて、「キャリア教育の4つの力」で児童の実態を把握し、単元で身に付けさせたい力を明確にしました。※ 囲みは、重点的に身に付けさせたい資質・能力

学校教育目標	よく考える子		じょうぶな子	思いやりのある子
	○めあてをしっかりつかんで学習に取り組む子 ○自ら課題を持ち、課題解決に主体的に取り組む子		○ねばり強く最後までやりとげる子	○誰とでも仲良く遊べる子 ○他人の立場を理解し、大切に する子
学校教育目標と照らし合わせた児童の実態	ふりかえる力 ・毎時間の学習が日々の生活や次の学習に結びついていることに気づいていない子がいる。	みとおす力 ・「何のために文章を読むのか」「なぜ要約するのか」など、今日の学習が今後どのような力として生きてくるのか見通しをもつことが苦手な子がいる。 ・明日の学習に生きる家庭学習の取り組みに差がある。	やりぬく力 ・最後まで頑張ろうという学習意欲に差がある(課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいるかどうか)。 ・学力に差がある。	かかわる力 ・多様な集団の中で他者と関わることが苦手な子がいる。 ・自分の考えと友達の考えに違いがあると、自信を持ってない子がいる。
実態を踏まえて、本単元で目指す児童の姿	・既習が活用できたと実感する児童の姿 ・本時で分かったこと、課題として残ったこと等を振り返り、リーフレットに至るまでの資料の取捨選択や必要な情報とは何かと試行錯誤を繰り返す児童の姿	・文章を要約するためには、どのようなことに目を向けどのような学習過程を行えばいいのかと理解し、その学習が沖縄の魅力を伝える学習とつながりがあることを見通して、資料を取捨選択する児童の姿 ・効果的に沖縄の魅力が伝わる工夫を試行錯誤する児童の姿	・沖縄の魅力を伝えるという目的をもって百科事典やインターネット等から情報を取り出し、伝えたい情報を整理し、要約する児童の姿	・複数の資料をもとに、自分の伝えたい沖縄の魅力を明確に伝える児童の姿 ・自分の思いや考えを自信をもって伝え合う児童の姿 ・沖縄の魅力について調べてきたことをまとめ、そのよさをリーフレットで伝え合う児童の姿

2. 「共有が鍵！ 学年組織力アップで教育効果の最大化を図る！」

【側面①:教科等横断的な視点】「単元配列表」を活用して、ゴールと手立てを教師間で共有し、共通実践へ

【側面③:人的資源の活用】県立総合教育センターを活用して、共通実践へ



学年で教材研究を深め、具体的な手立てについての共通実践を行う！

「何のために学ぶのか」「その学びを通してどのような力が身に付くのか」という「学ぶ意義」を明確にするため、単元配列表を作成します。この単元でどのような力を付けるのか、そのためにどのように学ばせるのかなど、まずは単元配列表を作成し、活用することで可視化・共有化を図ります。

学習課題の設定(単元を学ぶ意義)

社会科「地域で受け継がれてきたもの」と総合的な学習の時間「沖縄の魅力を伝えよう」と国語科の説明文「世界にほこる和紙」を複合単元として設定。「世界にほこる和紙」を読んで、筆者の説明の仕方を捉えたり要約したりし、社会科で学んだ「沖縄で受け継がれてきたもの」を総合的な学習の時間で百科事典やインターネットなどで調べ、国語科で「伝えたい沖縄の魅力」をリーフレットに書いて発信する。

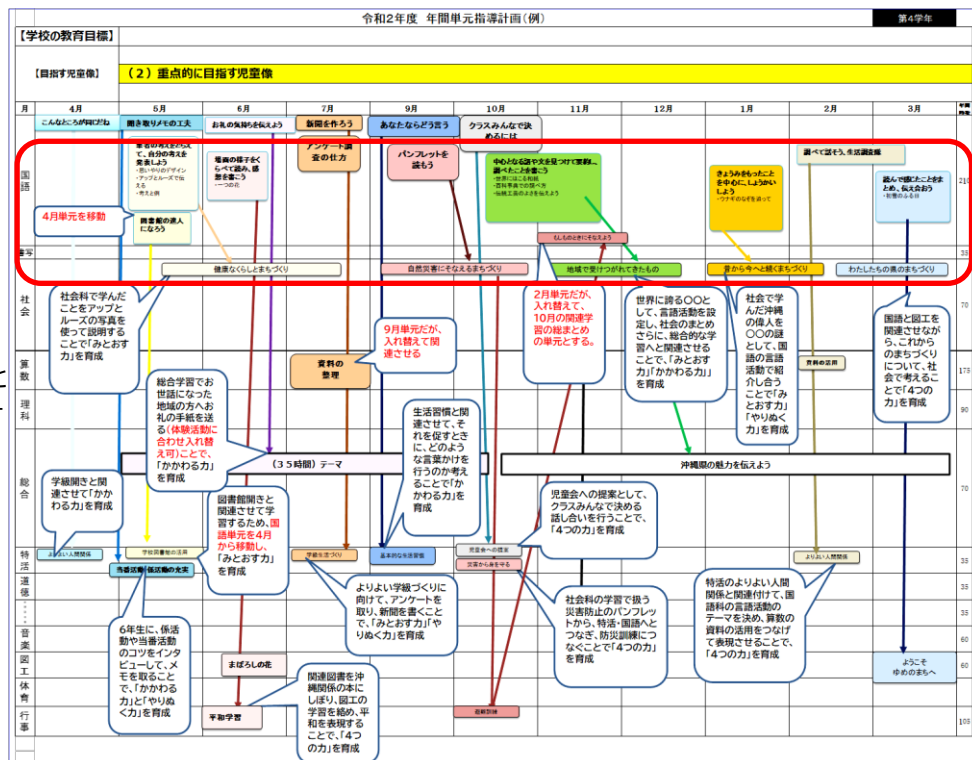
Plan

○身に付けさせたい資質・能力を育むために、学習のねらいや内容を捉え直し、いつ、何を、どのように学ぶかを学年で話し合い、柱にする教科や領域、行事等をつなげたり、並べかえたりする。

○何のためにつないだのかという意図を吹き出しで示すことで、つながりを共有しやすい。

今年度は国語科を軸に、「何のために学ぶのか」という学び意義で各教科等をつなぎ資質・能力の育成を図りました

つくってみよう！「単元配列表」※



3. 指導計画

◆実施学校名	A 小学校	◆学年	第4学年
◆教科名	国語	◆時間数	第3時/全15時
◆単元名	リーフレットを書くために大切な言葉や文を見つけ、要約しよう ～沖縄のみりよく発信～	◆教材名	国語「世界にほこる和紙」

◆単元で目指す児童像(単元の目標)

- ・百科事典の使い方を理解し、使うことができる。【知識及び技能(2)イ】
- ・自分の考えを説明するためにどのような例を挙げ、どのような順序で書くかを交流したり、書き表し方を工夫したりすることができる。【思考力・判断力・表現力等 B(1)エ】
- ・沖縄の魅力が伝わる工夫を試行錯誤しながら伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

教材研究

教師の意図

○筆者の書きぶり

- ・筆者が「世界にほこる和紙」として述べる理由につながる事例を捉えさせ、自分のリーフレットに生かす。

- ・社会科の学習を関連させることで、学び意義を明確にし、自分が伝えたい沖縄の魅力を伝えられる資料(事例)を取捨選択し、自分のリーフレットに生かす。

教師の手立て

○単元のゴールの明確化と対話の工夫

- ・ワークシートで自分が伝えたい魅力を図式化し、整理させることで、伝えたい主張と資料(事例)のつながりを捉えさせる。

- ・数種類の資料を取捨選択する際に、対話的活動を行うことで、新しい見方や表現に出会い、沖縄の魅力を伝えるための工夫を捉えさせる。

目指す児童の姿

単元のゴールに向かって、見通しをもって教材に関わり、他者との対話を通して、見方・考え方を広げ、リーフレットを完成させる児童

Plan

— 学校教育目標(目指す児童像)と授業をつなげる学習指導案例 —

学習指導案に、学校教育目標(目指す児童像)を明記することで、授業改善へ向けた視点の共有を図ることにつながります。

第4学年 国語科学習指導案

1. 単元の概要

単元・教材名	世界にはこる和紙 伝統工芸の良さを伝えよう
単元の目標	(1) 百科事典の使い方を理解し使うことができる。【知識及び技能(2)・7】 (2) 自分の考えを説明するためにどのような例を挙げ、どのような順序で書くかを交流したり、書き表し方を工夫したりすることができる。【思考力、判断力、表現力等B(1)・7】 (3) 沖縄の魅力を伝え合おうとする。【態度に寄与する力、人間性等】
取り上げる言語活動	・「世界にはこる和紙」を読んで、筆者の説明の仕方を捉えたり要約したりし、沖縄の魅力を百科事典などを活用して調べたことを書く活動。 (複合単元) リーフレットを書くために大切な言葉や文を見つけ、要約しよう ― 沖縄のみより発信 ―

2. 単元について

(1) 児童像

	よく考える子	じょうぶな子	思いやりのある子
学校教育目標	②のあてをしっかりとつかんで学習に取り組む子 ③自ら課題を持ち、課題解決に主体的に取り組む子	②ねばり強く最後までやりとげる子	②誰とでも仲良く遊べる子 ③他人の立場を理解し、大切にできる子
学校教育目標と照らし合わせた児童の実態	・ふりがえる力 ・毎時間の学習が日々の生活や文の学習に結びついていることに気づいていない子がいる。 ・「何のために文章を読むのか」「なぜ要約するのか」等、今日の学習が今後どのような力として生きてくのか見通しをもつことが苦手な子がいる。・明日の学習に活かせる学習の振り返りに意欲がある。	・やりぬく力 ・最後まで頑張ろうという学習意欲に差がある。【課題の解決に向けて、自ら考え取り組んでいるかどうか】 ・学力に差がある。	・かかわる力 ・自分の考えと友達との考えの違いがあると、自信を持てない子がいる。 ・多様な集団の中で他者とかわる力が苦手な子がいる。
実態を踏まえて、本単元で目指す児童の姿	・前置してきたことが活用できたと実感する児童の姿。 ・本音でわかったこと、課題として残ったことを日々振り返りリーフレットにまとめるまでの資料の取捨選択や必要な情報は何かと該当箇所を繰り返す児童の姿。 ・文章を要約するためには、どのようなことには目を向けるような学習過程を行えばいいのかと理解し、その学習が沖縄の魅力を伝える学習とつながりがあることを実感して、資料を取捨選択する児童の姿。 ・効果的に沖縄の魅力が伝わる工夫を試行継続する児童の姿。	・沖縄の魅力を伝えるという目的をもって百科事典やインターネット等から情報を取り出し、伝えたい情報を整理し要約する児童の姿。	・複数の資料をもとに、自分の伝えたい沖縄の魅力を明確に伝える児童の姿。 ・自分の思いや考えに自信をもって伝え合う児童の姿。

取り上げる言語活動を単元のゴールとして明確にし、子どもたちに見通しをもたせます。

単元のゴール

リーフレットを書くために大切な言葉や文を見つけ、要約しよう
～沖縄の魅力発信～

学校教育目標に照らし合わせながら、キャリア教育の4つの力「か・ふ・や・み」で単元の中で身に付けさせたい力を具体化します。黒字で囲んでいるのは、本単元で重点的に身に付けさせたい力(「み」と「おす力」「かかわる力」)です。

複合単元計画表

教科 時間	国語科 「世界にはこる和紙」	社会科 「地域で受け継がれてきたもの」	総合的な学習の時間 「沖縄の魅力を伝えよう」
1		那覇大綱引きについて	
2		世界遺産について	
3・4	学習の見通し・初発の感想交流		
5		伝統芸能について	
6			沖縄の魅力を調べよう
7	文章の組み立てを考える		
8		玉城朝薫について	
9・10	筆者の伝えたい和紙の魅力		
11・12			沖縄の魅力を調べよう
13・14	和紙の魅力を要約しよう		
15	要約した魅力を交流しよう		
16	沖縄の魅力を伝える文章の組み立て		
17・18			資料を集めよう
19～24	沖縄の魅力をリーフレットにまとめる		
今後		組踊新聞を書こう	世界遺産を調べよう

このように、身に付けさせたい力に合わせて、3教科を関連させて、単元を計画しました。

本時のねらい:沖縄の魅力を伝えるための資料を交流し、より伝えるために必要な情報はどれかを助言し合い、書くことができる。

	学習の流れと児童の活動	キャリア教育的視点
導入	1. 今日の時間のスケジュールを確認する。 2. めあての確認 自分の伝えたいことに合った資料(事例)を選んで書こう。	みとおす力 今日の流れを確認してから、めあてを立てることで、学習の見通しをもたせたい。
展開	3. 交流の視点を全体で確認した後、自分が伝えたいことと選んだ資料(事例)のつながりを伝え、助言をもらう。 辞書を引いている 資料のままの言葉だと分かりにくいから、言葉を変えると良いよ 階段という言葉は消して、正殿の左右という説明がよいよ。 4. 選んだ資料をもとに、伝えたいことを要約して書く。	かかわる力 他者と関わらせることで、対話を通して新しい見方や表現に気づかせたい。 みとおす力 教材文の学びを生かせるよう、掲示物を工夫して見通しをもたせながらリーフレットを作成させ、「書けた」という学び・育ちの実感を高めたい。
まとめ	5. 学習のまとめ 魅力(よさ)を書くために気をつけたこと 私が気をつけたことは、引用したい文章が長かったので資料の中の写す文章を減らしたことです。 6. ふり返り 僕ががんばったことは、友達に答えることです。なぜかという、考えてなかった質問がきたので、めっちゃ頭を使って疲れました。	

3. ルーブリック表に基づいたリーフレットの評価

国語【思考力・判断力・表現力等 B 書くこと(1)エ】

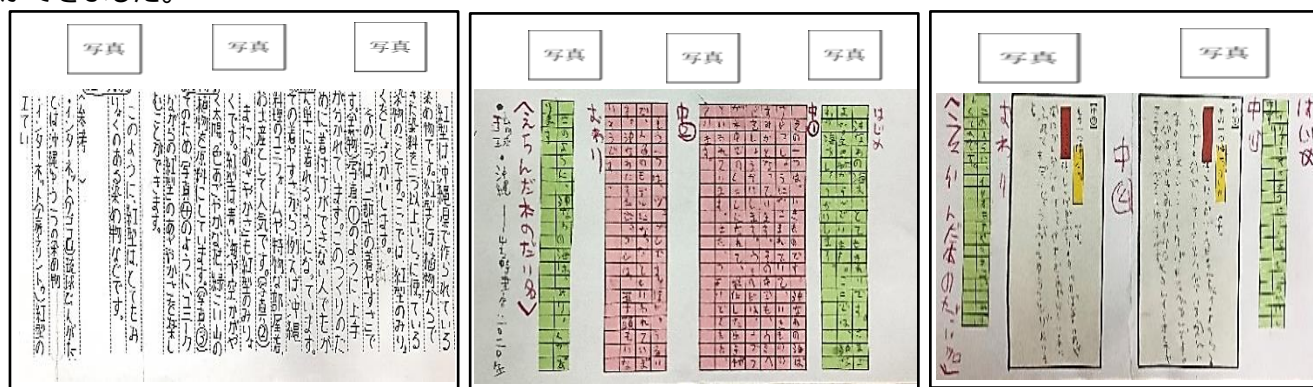
A 評価	伝えたい沖縄の魅力について事例と理由の関係を明確にして書いている。
B 評価	伝えたい沖縄の魅力について理由を明確にして書いている。
B の下(簡易版)	伝えたい沖縄の魅力について写真を取り入れて 3 段構成で書いている。

社会【思考力・判断力・表現力等 (5)イ】

A 評価	資料を比較・分類し、沖縄県の伝統や文化の特色を考え、表現している。
B 評価	資料を整理し、沖縄県の伝統や文化の特色を考え、表現している。
C 評価	資料を取り入れて、沖縄県の伝統や文化の特色を表現している。

今回児童が作成したリーフレットを国語科で身に付けさせたい力と社会科で身に付けさせたい力に合わせて評価したところ、以上の結果となりました。国語科における「世界にほこる和紙」の言語活動を、社会科・総合的な学習と関連させたことで、社会科で学んだことを生かして、自分の伝えたい「沖縄県の魅力」を国語科ではリーフレットにまとめ、総合的な学習で更に発展させていくという「学ぶ意義」が明確となりました。

国語科でリーフレットをまとめる際には、児童に完成したという「学び・育ちの実感」を味わってもらうために、リーフレットの型を複数用意し、児童に選択させたことによって、児童全員がリーフレットを完成することができました。



「記録に残す評価」としては、簡易版のリーフレットで完成させた児童に対して、「B の下」という評価を行っています。(実践研究で取り組んだリーフレットやワークシートは、本センターHP 上に見やすく掲載しています。)

Action

【成果】

- 学年間で共有し、実物(紅型やつばや焼、琉球ガラス等)を集め、実際に子どもたちに触らせることで、保護者と一緒に琉球ガラスを作製に行く児童や、中城城跡の写真を撮りに行く児童などが出てきた。また子どもたちがニュースを見るようになり、宮古のパーントゥを話題にする等、学びが自分事となり、沖縄県を誇りに思う気持ちが芽生えてきた。
- 教科を関連付け、見通しをもって取り組んだことで、社会科の組踊新聞作りの際に資料を選ぶ・減らす・つなぐ技を活用しながら要約を行い、時間内でスムーズに取り組むことができるようになってきた。他教科と関連させることで、子どもたちが取り組むべき学習課題が明確になり、主体的に学習に取り組むようになった。

【改善】

- 資料の準備が多かったなので、社会科の資料や総合的な学習の時間と関連付けて、より計画的に、次年度単元を構成していきたい。
- 沖縄の魅力を焦点化させるために、ワークシートを工夫した。しかしながら、たくさん魅力を出させて、後から絞っても良かったという意見も出たので、魅力の焦点化に向け、次年度の課題としてワークシートの改善を図りたい。

実践事例2

B中学校

自分の考えを表現できる生徒の育成
～語彙力育成を中心に～

◆実施学校名		◆学年	第2学年
◆教科名	国語	◆時間数	第3時/全5時
◆単元名	「私だけが知っている！〇〇の良さを伝えよう」	◆教材名	評論「動物園でできること」
◆単元で目指す生徒像(単元の目標)			
- 文章の全体と部分の関係や、例示の効果などに注意して、筆者の主張を読み取ることができる。 - 筆者の動物園に対する考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつことができる。			
(思考力・判断力・表現力等 読むこと(3)イ、エ)			

Plan (指導計画)

教科開きで教科を学ぶ意義を明確化

学習課題の設定(単元を学ぶ意義)

〇〇コーポレーションの企画課の社員として、『私だけが知っている！〇〇の良さ』という上司を納得させる説得力のある提案書を書けるようになるために、筆者の書きぶりを学ぶ。

教材研究

なぜ国語を勉強しないといけないの??

学校で - 自分の考えを言える - 話し合いができる - 発表ができる	日常生活に つける力 社会で - 考えた企画をプレゼン - 営業でのトーク - 電話での受け答え
相手の話を最後まで聞ける 情報を正確に聞き取れる	聞く力 - いろんな意見(考え)を自分の考えに取り入れられる - フェイクニュースに振り回されない
丁寧な文字が書ける 筋道の通った(論理的な)文章が書ける	書く力 - 顧客(商売相手)が納得する提案(文章)ができる - SNSで炎上しない(誤解を生む表現を招かない)
描写から登場人物の考え(心情)が読める 書かれていることの本当の意味を考えて読む	読む力 - その場の空気を読んだ言動がとれる(コミュニケーション能力) - 告白するときに従立つ
正しい日本語が使える 漢字が読める＆書ける 語彙が増える(「例えば」が豊富になる)	言語力 - 丁寧な言葉遣いは、自分を上品に見せる - 自分の考えたことや思いを正確に伝えられる
忘れ物をしない 提出物をきちんと出す 「知りたい」という好奇心をもつ	関心・意欲 - 準備を整えることは「心を整える」こと 「時間・約束」を守る人は信頼される

※「元気・やる気」があれば何でもできる！すべての成績の源です！

教師の意図

○筆者の書きぶり

- 文章構成から筆者の主張を捉えさせ、自分の論に生かす。
- 例示から筆者の説明の意図を捉えさせ、自分の論に生かす。

教師の手立て

○ワークシートと対話の工夫

- ワークシートで文章構成を図式化し、整理させることで、論のつながりを捉えさせる。
- ジグソー法で対話を通して、新しい見方や表現に出会い、文章構成の意図について捉えさせる。

目指す生徒の姿

見通しをもって、教材に関わり、他者との対話を通して、見方・考え方を広げ、提案書を完成させる生徒

D₀ (実践授業)

本時のねらい:「オランウータン→ペンギン→エゾジカ」の順序で例示されてい

	学習の流れと生徒の活動	キャリア教育的視点
導入	 1. 前時の確認を電子黒板で行う。 ○本時のめあてを生徒に考えさせ、生徒の言葉をつなげて、提示する。 本時のめあて 筆者の真の考えを具体例の構成をもとに考え、共有しよう。	みとおす力 生徒自身でめあてを考えることで、本時で身に付ける力に見通しをもたせたい。
展開	2. エキスパート活動:担当動物の特徴・展示の工夫・学びの場について整理する。    【オランウータン】 【ペンギン】 【エゾジカ】 3. ジグソー活動:エキスパート活動の考えを統合して、「なぜ、この順番で例示されたのか」という筆者の意図を読み取る。  4. クロストーク:グループで考えたことを、全体で共有する。   ・人間の生活から、はなれている順番 ・エゾジカを最後にすることで、まとめにつなげやすい、 (筆者の主張が「野生動物と共に関わる」だから) なんでオランウータン? → 絶滅の危機だから? なんでペンギン? → 人間だから なんでエゾジカ? → 身近な動物だから この順番の理由 エゾジカが最後なのは、身近な動物だから、一番身近な動物だから、とくに生活という点で、エゾジカが身近だから。オランウータンの危機は人間関係、エゾジカは人間関係の問題だから ペンギンはなぜなの? 5. 個人でまとめる。	かかわる力 ○他者と関わらせることで、対話を通して新しい見方や表現に出会わせたい。 ○筆者の構成の意図という問いで、教材文に関わらせることで、自身の提案文構成の際に、今回の読みの力を生かしたい。
まとめ	6. 振り返りシートにまとめる。 振り返りシートより 自分の考えは、身近な動物から出してという考え方だった。でもそれを出したところでどうなの?という壁にぶち当たった。Tさんのグループの意見に「エゾジカを最後にもってきて筆者の主張をまとめやすくしている。」という考えにすごく納得して、自分の意見に取り入れた。	

ふり返し

の落表の考えをまいて、そんな考えもあつたんだ
思うところかゝつた。
グループの考えをまかな
かつたら、自分の考えがいまになつてしまつたと
思つたら、
グループではなしかうと一ムではあからなかつた
考えがでてまじりしたのでよかつたです。
はじめは、多くの人にエグジカなどのみりくとして
もらうために、人があまり知らないうちから
のグループの考えを聞いて、人間の生活から
はなれてゐる現象という考えに変わりました。

人の比較と云ふ意見で
 人々物と禽獣のちがいがよくよくにあらはれた
 彼の邦で人間の生活が如何に順々となり意見を筆原の主張
 自分はよくよく考へてみたから納得できた
 (三着目)

私に、さん達のみんなの意見に
影響されました。
全然思いつかない事か書かれて
います。いい三人の風にとりま
られるのかと感へしました。
自分たちを出しきれなかった
意見、考えにならうとすい

○パフォーマンス課題を単元のゴールとして設定したことで、学びが自分事となり、教材文の学びを生かしてパフォーマンス課題に取り組む姿が見られた。

Check (記録としての評価)

【課題】「私だけが知っている。〇〇の良さ！」の提案書を書こう。
～上司を納得させる、説得力のある文章を目指して（例示の構成を工夫しよう）～

【A評価への道】
「動物園でできること」の書き方の工夫(序論・本論・結論)を取り入れること。→特に例示の順番を意図的に！
原稿用紙の使い方に注意し、500字以上580字以内の文章にすること。



「神繩」と呼ばれたら、皆さんは何を思ふか。『海がきれい』、『シーサーがある』、『暖かい』と、ほとんどの人が外観を想像するだろう。しかし、神繩はこのように良さだけでなく、昔からの歴史もあるのだ。では、どのようにして、神繩に來たさいに観光目的以外で歴史や伝統にも興味をもてもらうか。例示を上げながら、考えていく。

まず最初に、知っているのが入柄の良さである。夏に來たら絶好というほど海に行こゝがよいだろう。その中でぜひ神繩の人と交友してほしい。とても氣づくだからだ。多くの人がフレンチドリーから、なじめるのも一環で、良い思い出にもなるだろう。

そして次は伝統品である。神繩の昔ながらの家だ。たり、神繩にしかないものにち。とても興味がいふられればいい。その氣持が、知りたし」といふ行動につながる。

より神繩に感入をもつようになる。

最後に神繩の歴史である。神繩は昔は琉球王国という国で、中国に分類されていた。そこから大きく発展し、「戦争」といふ痛ましい時代をのりこえて今の活氣ある神繩となつたのだ。もし時間があるなら平和記念公園へ行、ほしい。さ」と強い衝撃をうけ、印象に残るだろうから。

このように、神繩には多くの魅力がある。観光だけでなく歴史も学んで、あなたの地域に持ち帰り、多くの人に広めてほしい。

[illegible]

B 評価	「序論・本論・結論」を取り入れ、例示を述べて提案している。
C 評価	三段構成で提案してい

○ワークシートの工夫

学習の到達度を測るパフォーマンス課題を見ると、文章構成の理解度はほぼ全員が達成できているが、単元の学び(ゴール)である「例示の提示の工夫(順序立て)」については、半分以下の生徒ができていない。毎時のワークシートでの学びを可視化でき、ふり返らせる工夫が必要である。

○ジグソー学習

単元のふり返しからは、「自分にない考えにふれ、見方が広がった。」という記述があった。しかし、クロストークの時間を十分にとることができなかったため、エキスパート活動を前時に取り組むなど、時間の配分の仕方について改善したい。

実践事例3

県立 C高等学校

他者を理解し、伝え合うことができる生徒の育成
～効果的なインタビュー方法とまとめ方の工夫を通して～

3学年 国語表現

単元名:「インタビューを通して友達の『今まで生きてきた中で一番幸せなこと』をまとめよう」
～効果的なインタビュー方法とまとめ方の工夫を通して～
教材名:大修館書店『国語表現 改訂版』

指導計画

①単元で目指す生徒像

- ・インタビューにおける話し方や聞き方、記事のまとめ方に関する表現方法の工夫などについて理解を深めることができる。
- ・話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりすることができる。
(話すこと・聞くこと(1)ア)

②学習課題の設定(単元を学ぶ意義)

アトランタ五輪で金メダルを獲った水泳・岩崎恭子選手のインタビュー映像を視聴し、自身の「今まで生きてきた中で一番幸せなこと」をペアインタビューで伝え合う。インタビューに際しての注意事項や効果的な聞き取り方法を考え、積極的に話を引き出す。そこで他者の経験に触れ、その人物についてより深く知り、互いのことを伝え合うことで、かかわる力を養う。

③教材研究

教師の意図

- インタビューのポイントを理解させる。
- インタビューを通して、他者理解を促し、伝え合う力を育む。

教師の手立て

- 動機付け(インタビューの動画視聴)
- ワークシート(インタビューの手順、質問事項の作り方、話の引き出し方 など)
- インタビューを元にした紹介記事の作成
(新聞記事の分析、書き方のポイント)

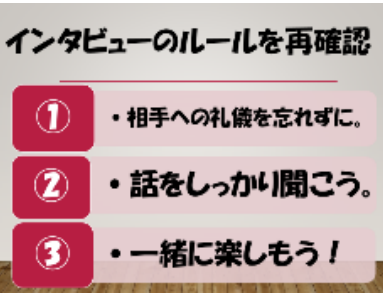
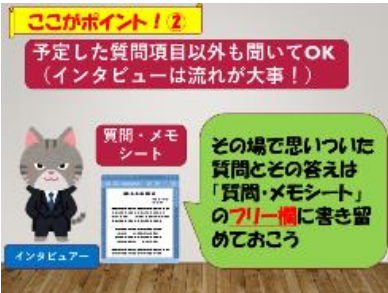
目指す生徒の姿

クラスメイトと互いの経験についてインタビューし合い、それを記事にまとめ、他者の考えを尊重しながら、自分の考えをまとめたり、他者との交流ができる生徒

単元計画

第1次	インタビューにチャレンジ	①	インタビューのポイントを学ぶ(事前準備がインタビューの成否を左右する!)
		②	質問項目を考える(どのような質問や工夫をすれば、よりよく引き出せるか。)
		③	インタビューの実践(本時)
		④	インタビューの内容をまとめる(インタビュー時のメモをもとに文にする。)
第2次	記事を書こう	⑤	記事のまとめ方のポイントを学ぶ(新聞記事の構成を分析してみよう)
		⑥～⑦	インタビュー内容を記事にまとめる(5W1H、逆三角形スタイル、見出し等)
		⑧	相互鑑賞(よい点や感想等を付箋に書き込み貼る。感想を伝え合う)

本時の実践授業

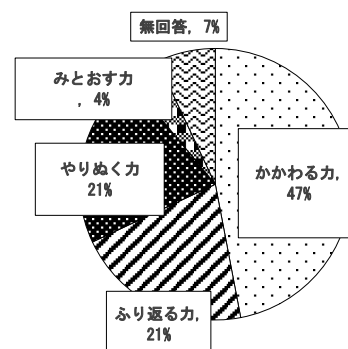
	学習活動	キャリア教育の視点
導入	1.前時の内容の再確認 インタビューの手順の再確認  	みとおす力 
	2.本時の学習の流れや内容の説明 【学習目標】 インタビューの仕方や効果的な質問方法について理解し、実践する。	
展開	3.インタビューの実際 ① ペアを作り、インタビューの準備をする。(ペア) ※よい雰囲気ですmoothな進行ができるよう、インタビュアーとインタビューー双方の心構えやポイントを実施直前に再度確認する。    ②「今まで生きてきた中で一番幸せなこと」について交互にインタビューを行う。(ペア) ※インタビュー中は単語をメモする程度にとどめるよう注意を促す。 ③ インタビューを実施しながら回答内容をワークシートに記録する。(個)	かかわる力  

終 末	4.本時の振り返り ① 振り返りシートの記入 ② 次時の予告 ※インタビューの際に使用した質問メモ(ワークシート)を参考に、文章にまとめていく。	振り返る力 
--------	--	--

アンケート及び感想(N=28)

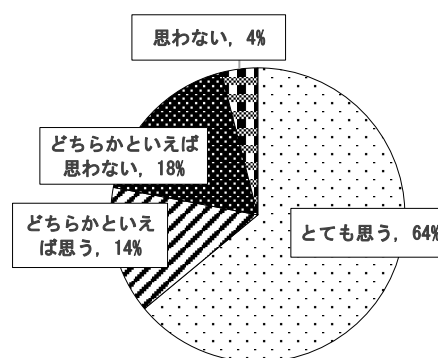
Q 今回の授業を通してどの能力が高まったと思いますか	
かかわる力【人間関係形成・社会形成能力】(47%)	・自分の考えをしっかりと伝える練習になった。 ・いろいろな人の考えや立場に立って理解することができた。
ふり返る力【自己理解・自己管理能力】(21%)	・記事を書く上で相手のことを知らないといけないし、自分のエピソードを話すときも、自分が一番分かっていないといけないから。
やりぬく力【課題対応能力】(21%)	・記事を書くときに計画を立てて、書くときに困らないようにしていた。

今回の授業を通してどの能力が高まったと思いますか



Q 今回の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。	
肯定的回答 (78%)	・質問をして相手のことを知ったり、自分のことを振り返って伝えたりすることは、これからいろんな場面で使えると思うから。 ・社会に出たら、自分で考えて行動したり、人に意見を言うときに話をきちんとまとめられてたらいいいから。 ・社会に出たとき、「話す」ってことは日常的で、メモを取ることとか、質問するときの言葉遣いは、今勉強しておかないと恥をかくだろうと思ったから。 ・プレゼンするときなどに役立ちそう。
否定的回答 (22%)	・記事を書く機会がないから。 ・相手の好きな色とか書いても誰も求めないから。

今回の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。



(授業者より)

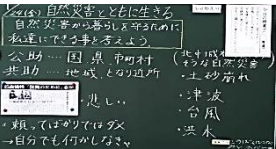
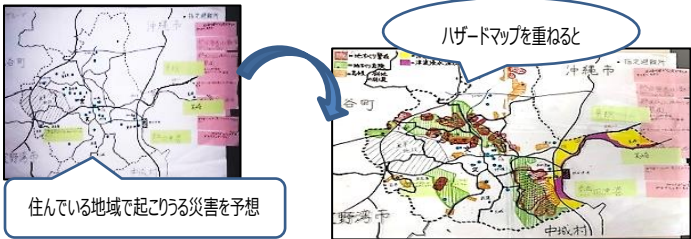
生徒たちは、インタビューや記事作成を通して自己理解や他者理解をしながら学習を進めていた。インタビューでは、質問に答えることに対して難しいと感じる生徒が多かったようである。自分の想いや考えはあるものの、それをどのように表現したらよいか難しいと感じている生徒や、自己を見つめ表現していくことが苦手な生徒もいた。今後も、自己理解や自己表現が苦手な生徒の支援をしつつ、他者と関わりながら伝え合う力を高める指導の継続が必要である。

VI 実践事例集

県基本方針に基づき、キャリア教育の4つの力（か・ふ・や・み）を踏まえて、「学び・育ちの実感」を高めるための教育実践・参考資料として活用を図ることを目的に実践事例を作成した。作成に当たっては、認定こども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で現在取り組まれている実践を、キャリア教育の4つの力で捉え直したものを9本掲載する。実践事例の詳細は、本総合教育センターのWebサイトよりデータをダウンロードすることができ、各学校の実態に応じて活用できるようにした。

※下記は簡易版掲載のため、詳細は本センターWEBサイトよりダウンロード可能

自然災害からわたしたちの暮らしを守るためにできることは？			
◆実施学校名		◆学年	第5学年
◆教科	社会科	◆時間数	第4・5時／全6時間
◆単元名	自然とともに生きる	◆関連教科	
○授業のねらい（本時の目標） 自然災害から暮らしを守るために、「減災」の考え方が広まっていることを捉えるとともに、地域で協力してできることや、自分にできることを考えられるようにする。【思考力、判断力、表現力等】			
○授業の概要 ・地域の防災マップをもとに自分の住んでいる地域で起こりうる災害について確認する。 ・自然災害がおきたとき、「減災」の考えに基づき、自分にできることを「自助」「共助」「公助」の視点で話し合う。			
○キャリア教育の目標（キャリア教育的視点） ・みとおす力：自分の住んでいる地域で起こりうる災害を想定し自分にできることは何かを考える。 ・かかわる力：防災マップから地域の様子を知り、地域住民との関わり方について考える。 ・ふり返る力：学習を通して自己の役割を理解する。			

時間	授業の内容・流れ	キャリア教育的視点
導入	1. 台風19号に関する記事を見て、課題を持つ ※南相馬市20代市職員が避難所準備で残業後、帰宅途中に死亡 （2019年10月18日付 朝日新聞より）  ○本時のめあてを確認する。 自然災害から暮らしを守るために、私たちにできることは何か考えよう	みとおす力 ○災害が起きたとき、役場（公的機関）にばかり頼ってはいけない！地域に起こりうる災害を想定し、自分たちにできることは何かについて考える。
展開	2. 防災マップをもとに地域で起こりうる自然災害を確認する。  住んでいる地域で起こりうる災害を予想 ハザードマップを重ねると	みとおす力 ○防災マップから自分の地域に起こりうる自然災害について知ること、課題に対応する力を高める。
	3. 「減災」の視点で自然災害が起きたとき、自分にできることを話し合う。  災害が起きたときに備えて、危険な場所を知っておく	かかわる力 ○自然災害が起きたとき、家族や地域住民との協力について考える「自助」「共助」「公助」。 ○起こりうる災害を想定し、自分たちにできることを考えることで地域の一員としての自覚を高める。
まとめ	4. 自分たちの地域で起こりうる自然災害から暮らしを守るため、私たちにできることについてふり返り、まとめる。	ふり返る力 ○本時の学習と関連付けたまとめを各自で行うことで、自己の役割を考える。

Ⅶ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 研究テーマ「一人一人のよさを未来へつなぐキャリア教育のあり方」について理論研究を進め、「育みたい資質・能力の明確化」「学ぶ意義」「学び・育ちの実感」「キャリア教育の4つの力」をキーワードに、各学校において取り組むべきキャリア教育の方向性をカリキュラム・マネジメントの視点を通して示すことができた。
- (2) 本県のキャリア教育に関する実態調査・意識調査を幼・小・中・高・特別支援学校と全ての校種において実施することができ、本県の現状を把握し、分析することができた。
- (3) 理論研究に基づいた実践研究や実践事例を集め、実践研究をリーフレットの形で作成し、リーフレットや各校種で集めた実践事例を Web 上に掲載し、各学校で活用できるようにした。

2 課題

2年次の研究は、1年目である今年度の研究成果に基づいて、より具体的な実践研究を各校種で、取り組んでいく必要がある。次年度は、各校種の発達段階や特色に応じた実践事例を、各学校や行政機関等が活用できるよう、わかりやすい形で継続して発信していく。

〈参考文献〉

- 日本キャリア教育学会編 2020 『キャリア教育概説』 東洋館出版社
- 村川雅弘 吉富芳正 田村知子 泰山 裕 2020 『カリキュラム・マネジメント実現への戦略と実践』 ぎょうせい
- 原田 信之 2018 『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証』 北大路書房
- 吉富 芳正 2017 『『社会に開かれた教育課程』と新しい学校づくり』 ぎょうせい
- 奈須 正裕 2017 『資質・能力と学びのメカニズム』 東洋館出版社
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2019 『『キャリア教育』資料集 平成30年度版』
- 沖縄県教育委員会 2020 「沖縄県キャリア教育の基本方針」
- 沖縄県教育委員会 2020 「沖縄県学力向上推進5か年プラン・プロジェクトⅡ
～学びの質を高める授業改善・学校改善～」
- 沖縄県立総合教育センター 2018 「これからの時代に必要となる資質・能力の育成
～カリキュラム・マネジメントの視点を通して～（1年次）」
- 沖縄県立総合教育センター 2019 「これからの時代に必要となる資質・能力の育成
～カリキュラム・マネジメントの視点を通して～（2年次）」
- 長崎県立教育センター 2018 『『主体的・対話的で深い学び』リーフレット』

〈参考URL〉

- 大分県教育委員会 「令和2年度用 小学校各教科等単元配列表（例）の公開」（2020）
<https://www.pref.oita.jp/r2-tangenhairesu.html> （2020 11月アクセス）
- 文部科学省 中央教育審議会答申 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年 12月）」
https://www.next.go.jp/b_menu/chukyo0/toushin/138071.htm （最終閲覧：2020年9月）
- 文部科学省 中央教育審議会答申 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年 1月）
https://www.next.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm （最終閲覧：2020年7月）
- 文部科学省 中央教育審議会答申 「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）（平成11年 12月）」
https://www.next.go.jp/a_menu/shotou/career/050150502/001.htm （最終閲覧：2020 7月）

〈参考WEBサイト〉

- 藤田晃之 2019 「Career Guidance Vol.427」 Recruit
- Souken.shingakunet.com/career_g/2019_cg427_9.pdf（最終閲覧：2020年12月）